

北海道教育大学附属学校札幌地区 小・中・ふじのめ学級連携教育

グローバルな視点を基にした
小・中・ふじのめ連携教育

北海道教育大学附属札幌小学校

北海道教育大学附属札幌中学校

北海道教育大学附属札幌小・中学校特別支援学級（ふじのめ学級）

連携教育の実践誌刊行にあたって

北海道教育大学附属札幌小学校校長

高久 元

日頃より北海道教育大学附属学校園の教育・研究にご支援・ご協力を賜り、誠にありがとうございます。この度、附属札幌小学校、附属札幌中学校、附属札幌小・中学校特別支援学級（ふじのめ学級）の連携教育にかかわる実践誌刊行にあたりまして、一言ご挨拶申し上げます。

平成 28 年 4 月に施行された学校教育法の一部改正により、小中一貫教育を実施する学校として義務教育学校という学校種が規定されました。北海道では道東地域を中心に義務教育学校 5 校が設置され、さらに根室市にも開設が予定されています。北海道教育大学附属釧路小・中学校においても義務教育学校設置に向けて準備が進められています。小・中学校の義務教育学校化や、併設型の小中一貫教育は全国的な流れとなっており、国公立の義務教育学校は 48 校（平成 29 年度）から 100 校（平成 35 年度）、併設型小中学校は 253 件（平成 29 年度）から 525 件（平成 35 年度）と、いずれも今後 5 年間で倍増する予定となっています（「文部科学省 小中一貫教育の導入状況について」より）。北海道教育大学の各地区附属学校でも、北海道の子どもの学力向上を目指して、また公立学校教員の授業力向上に寄与することを目指して、それぞれ特色を活かしたテーマをもって、小中一貫教育について研究・実践を積み重ねて参りました。特に札幌地区では「グローバルな視点を基にした小・中・ふじのめ連携教育」をテーマに、「人と環境」、「人と人」という視点で、様々な実践を積み重ねています。札幌地区は、小・中・ふじのめの建物が隣接し廊下でつながっているという構造的な利点、連携教育をサポートする大学も同じ敷地内にあるという利点があり、それらもまた連携教育を強力に後押ししています。文部科学省が定義する小中一貫教育、すなわち「小・中学校が目指す子供像を共有し、9年間を通じた教育課程を編成し、系統的な教育を目指す教育」というところまでには至っていませんが、札幌地区では、小中学校教職員一体となって隣接する学舎で学ぶ子どもたちの9年間の成長を見守り、小中の教育課程、教育の系統性を頭に置きながら日々教育・研究を行っているところです。

本実践誌の中には、札幌地区以外の道内附属学校、北海道内の公立小・中学校でも実践していただけるような例や指導案を掲載しています。例えば、児童・生徒が栄養教諭の助言を受けながら栄養バランスを考えた給食メニューの提案、小・中学校合同あるいは小学校とふじのめ学級合同の英語の授業、教科の専門性を生かした異校種での授業など、多くの実践例が紹介されています。これらの実践例が公立小・中学校、特別支援学級で活用されますことを切に願いますとともに、既に小中一貫教育、連携教育を実践されている先生方には、ご指導、ご意見をいただければ幸いに存じます。小・中・ふじのめの連携教育の改善を重ねながら、新たな実践も加え、9年間の義務教育で子どもたちの資質・能力を育めるよう研鑽を積んでいく所存です。

目 次

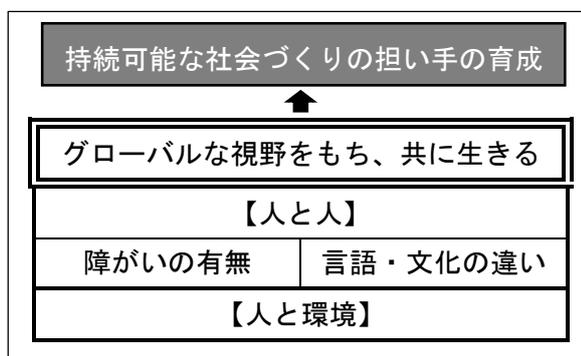
はじめに	1
目次	3
札幌地区の特色ある取組について 「グローバルな視点を基にした小・中・ふじのめ連携教育」	4～7
小・中・ふじのめ連携の推進の実際	
Ⅰ 小学校・中学校・特別支援学級（ふじのめ学級）の連携	8～11
Ⅱ 小学校・中学校・特別支援学級（ふじのめ学級）における授業の実際	
1 小・中・ふじのめ学級の児童・生徒の交流及び共同学習にかかわる授業実践	13～37
2 教員が他校種の児童・生徒に対して行った授業実践	40～45
3 小・中・ふじのめ学級で、目的を共有しながら取り組んでいる行事等の実践	48～53
あとがき	57

札幌地区の特色ある取組について

グローバルな視点を基にした小・中・ふじのめ連携教育

1 はじめに

北海道教育大学では、第3期中期目標として、北海道の公立学校教員の授業力向上に寄与することを目指して、旭川・釧路・函館・札幌の4地域の附属学校園それぞれにおいて、各地区の特色を活かした小中一貫教育推進事業に取り組んでいる。そのような中、札幌地区では、「グローバルな視点を基にした小・中・ふじのめ連携教育」をテーマとした実践を行っている。具体的には、食育や環境教育、防災教育などを窓とした“人と環境との関わり”を重視した学びや、国際理解教育やインクルーシブ教育などを窓とした“人と人とのつながり”を重視した学びを、小学校・中学校・ふじのめ学級と歩調を合わせ展開している。これにより、グローバルな視野をもち、多様な社会の人々と共に生きるための態度や技能を身に付け、持続可能な社会づくりの担い手となる児童・生徒の育成を図っている。



2 持続可能な社会づくりの担い手の育成

今日、世界は大きな転換の時期を迎えている。21世紀に入り、環境・経済・社会のすべての分野で深刻かつ複雑な問題が発生し、その解決策、社会の在り方が問われている。自然環境に加え、社会的条件に関わるグローバリゼーションの進展に伴い、各国間の経済格差や地域間格差は、社会全体の持続可能性を脅かそうとしている。そのような中、将来の世代の欲求を満たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような開発が行われていくことが望まれている。そして、その社会づくりの担い手となるのが、まさしく、現在私たちが関わっている目の前にいる児童・生徒である。

では、“持続可能な社会づくりの担い手”とはどのような児童・生徒を指すのか。それは、グローバルな視野をもち、多様な社会の人々と共に生きるための態度や技能を身に付けている児童・生徒と考える。

(1) “人と環境との関わり”を重視した学び

これに関わっては、「食育」「防災教育」「環境教育」「エネルギー教育」が関連する。ここで、各々の目的や育みたい力を整理する。

①食育

食育は、生きる上での基本であって、知育・徳育・体育の基礎となるものであり、様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実

現することができる人間を育てることが目的である。(農林水産省 HP より)

②防災教育

ア 自然災害等の現状、原因及び減災等について理解を深め、現在及び将来に直面する災害に対して、的確な思考・判断に基づく適切な意志決定や行動選択ができるようにする。

イ 地震、台風の発生等に伴う危険を理解・予測し、自らの安全を確保するための行動ができるようにするとともに、日常的な備えができるようにする。

ウ 自他の生命を尊重し、安全で安心な社会づくりの重要性を認識して、学校、家庭及び地域社会の安全活動に進んで参加・協力し、貢献できるようにする。

(文部科学省 HP より)

③環境教育

幅広い領域にわたる環境教育は、「自然・生命」(自然調和型社会)、「エネルギー・地球温暖化」(低酸素社会)、「ごみ・資源」(資源・循環型社会)に加え、「ともに生きる」(共生社会)の4つに分類される。各分野それぞれが目指す学びの成果を「気づき・理解」「技能・行動」の二つの観点から示し、全分野に共通する成果として「思考・判断」という観点がある。学校における環境教育は、生きる力の一要素である「自ら課題を見つけ、学び、考え、主体的に判断し、行動し、問題を解決する資質や能力」を向上させることによって、生きる力の育成と結びつけることが重要であると考えられる。

(環境省 HP より)

④エネルギー教育

地球温暖化問題等の環境問題も含めエネルギーを取り巻く様々な状況や課題に関する正確な知識と、つかみどころのない「エネルギー」を科学的に正しく理解を深めることである。エネルギー教育においては、一方的な価値観を押しつけるものではない。

(中国・四国地区エネルギー教育推進会議 HP より)

これらは、いわゆる「〇〇教育」と呼ばれるものであり、上記のように各々目的や固有に育みたい力や態度がある。ただ、これらには共通項がある。具体的には、次のようなものが挙げられる。

- | | |
|-------------|------------|
| ・多面的、総合的思考力 | ・未来予想力 |
| ・計画力 | ・進んで参加する態度 |

(2) “人と人とのつながり” を重視した学び

これに関わっては、「インクルーシブ教育」「国際理解教育」が該当する。(1)と同様に、各々の目的や育みたい力を整理する。

①インクルーシブ教育

「共生社会」とは、これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会である。それは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である。このような社会を目指すことは、我が国において最も積極的に取り組むべき重要な課題である。

共生社会の形成に向けては、障害者の権利に関する条約に基づくインクルーシブ教育システムの理念が重要であり、その構築のため、特別支援教育を着実に進めていく必要がある。(文部科学省 HP より)

上記の内容から、インクルーシブ教育においては、以下のように育みたい力や態度を整理することができる。

- ・ 批判的思考力
- ・ 人間関係形成力
- ・ 他者と協力する態度

②国際理解教育

国際理解教育を進めていくに当たって、特に重要と考えられることは、多様な異文化の生活・習慣・価値観などについて、「どちらが正しく、どちらが誤っている」ということではなく、「違い」を「違い」として認識していく態度や相互に共通している点を見つけていく態度、相互の歴史的伝統・多元的な価値観を尊重し合う態度などを育成していくことである。一つのものの方や考え方にとらわれて、異なる文化・生活・習慣などを断定的に評価するようなことは、子供たちをいたずらに偏見や誤った理解に陥らせる基になりかねず、決してあってはならないことである。

また、国際理解教育を進めていくに当たっては、自分自身が何ものであるのかを知ること、すなわち自分自身の座標軸を明確に持つことが極めて重要である。このことなくしては、相手からも理解されず、また、相手を理解することもできないと言わなければならない。日本人として、また、個人としての自己の確立があいまいで、自らのよって立つ位置が不明確なままでは、国際的にも評価されないのである。

(文部科学省 HP より)

上記の内容から、国際理解教育においては、以下のように育みたい力や態度を整理することができる。

- ・ コミュニケーション能力
- ・ 異文化理解力
- ・ 表現力
- ・ つながりを尊重する態度

(3) 小・中・ふじのめ連携の推進にあたって

前項において、札幌地区で取り組む内容を、いわゆる「〇〇教育」と呼ばれる形で表現し、それを推進する目的や育みたい力として整理したが、必ずしも、「〇〇教育」を行えば、持続可能な社会づくりの担い手を育成できるというわけではない。では、具体的にどのような取組を進めれば、目的の達成に近付くことができるのだろうか。次の3点に集約したい。

① 9年間の育ちを見つめることができる学習環境の活用

附属小学校から、大半の児童が附属中学校に進学する。当たり前のことのようにあるが、9年間の育ちの過程を直に把握できるこの状況は特筆すべきものである。しかも、小学校・中学校・ふじのめ学級の各校舎が、棟続きになっており、容易に行き来できる環境は、他校においてそうそう見ることができない。一人の児童・生徒がどのように成長していくかを見守ることができるこのような学習環境を活かさない手はない。9年間を通して一人一人の児童・生徒を育てる、という感覚を大切にしたい。

② 共通の課題（テーマ）を用いた異校種間を貫くカリキュラムの作成

9年間の成長過程を意識し、共通の課題（テーマ）を発達段階に応じてカリキュラムに位置付けるというものである。例えば、札幌地区では、JICA 研修生の受け入れなど、外国人と関わる機会が多い。そのことで、多様な文化や価値観に触れることができるが、児童・生徒の発達段階に応じて、その受け止め方にも変化が見られる。小学校段階では、文化面での知見の広がりが見られるが、中学校段階では、捉え方や考え方の違いなど、価値観の共通点や相違点などに、より目が向くことになる。

このように、共通の課題（テーマ）に関する学習活動を、各校でそれぞれのねらいに即してまずは取り組む。その後、各校種での成果や課題を整理し、修正等を図ることで、連続性や系統性を意識した一連のカリキュラムが完成できると考える。

③ 異学年交流・相互乗り入れ授業の実践

これまでも多数取り組んできたことではあるが、学習形態の工夫を図ることで目標の達成に向かう。

校種を超えた異学年交流に関わっては、児童・生徒同士が直接的に関わることで、コミュニケーション能力が身に付いたり、他者理解が促進されたりすることにつながるだろう。これらを通して、客観的に自己を見つめ直すことができるかもしれない。また、相互乗り入れ授業においては、普段接することのない教職員との関わりを通して、異なる視点の広がりが期待される。教職員の立場からしても、児童・生徒理解の深化につながるだろう。

以後、札幌地区における具体的な取組の詳細を示していくこととする。

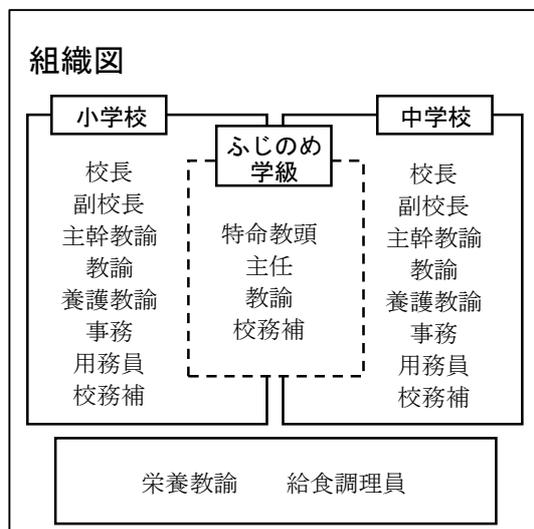
小・中・ふじのめ連携の推進の実際

I 小学校・中学校・特別支援学級（ふじのめ学級）の連携

(1) 学校の組織形態

附属札幌学校には、小学校、中学校、特別支援学級「ふじのめ学級」（以下ふじのめ学級）が設置され、児童・生徒は計 777 名（平成 30 年度）が在籍する。

ふじのめ学級は、札幌小学校と札幌中学校の両方にある特別支援学級である。小・中学校にそれぞれ校長と副校長、主幹教諭が置かれ、管理している。また、ふじのめ学級においては特命教頭が学級を管理している。校務補は小・中・ふじのめ学級に 1 名ずつ、用務員は、小学校 1 名、中学校・ふじのめ学級に 1 名の計 2 名が配置されている。



(2) 学習環境

小学生と中学生はそれぞれ独立した校舎で学習し、学校行事や時程は別である。ふじのめ学級にも別校舎があり、体育館や教員室も設置されている。小・中・ふじのめ学級の校舎は接続しており、自由に行き来することができる。入学式や卒業式など、ふじのめ学級の児童・生徒は小中学校の行事に参加している。（ふじのめ学級独自の行事も行われる。）

給食室は小学校の校舎にあり、全児童・生徒の給食を提供している。



ふじのめ学級の体育館（小中とは独立したふじのめ学級の学習環境がある）



左の校舎が中学校、右手が小学校



ランチルームの壁を外すと小・中の校舎がつながる（奥：中学校、手前：小学校）

(3) 連携の在り方

小・中・ふじのめ学級では、様々な形で教員同士や児童・生徒同士の交流を継続的に行っている。小・中 9 年間の系統を考慮した学習テーマ（防災・安全・国際交流など）を位置付けたり、資質・能力を効果的に育むために、各学校の研究内容を連携させたりしている。このように、9 年間の義務教育の課程を通して児童・生徒を育てるという視点を持ち、小・中・ふじのめ学級に

において、目標を共有することを大切にしている。

また、小学生と中学生が合同授業を行い、交流する活動も取り入れている。

① 教員間の連携

教員同士が集まる機会には、新学習指導要領に位置付く、資質・能力の育成につながる小・中の研究内容の関連や、防災や安全などの共通テーマに関わる学習の進め方について連携している。



ア：授業交流【校内公開授業】

1年間で、全教員が校内で授業を公開する。実施する授業ごとに、全教員に日程をメールで案内する。それぞれの専門・担当教科の授業を参観し、小・中・ふじのめ学級の垣根を越えた意見交流を日常的に行い、9年間の学習内容の系統性を検討する機会としている。

イ：授業交流【研究大会】

平成30年度は、7月初旬に小学校とふじのめ学級が、7月末に中学校がそれぞれ研究大会を開催した。また、小学校では、11月から2月にかけて「附属で学ぶ会」を開催した。これらの研究会では、例年、のべ1800名程度の参会がある。この研究大会では、指導要領が求める内容を土台とし、研究部が中心となって提案する理論を実際の授業で示す場である。小学校が研究大会を実施する際には、中学校とふじのめ学級を家庭学習日とし、全校種の教員が参加できる環境を整え、各教員が専門教科や担当教科の授業を参観し、研究討議では小・中・ふじのめ学級、それぞれの立場から意見を述べる。外部からの参会者に、小・中・ふじのめ学級の連携の在り方を発信する機会にもなっている。



また、前日準備や当日の会場設営、後片付けなども、小・中・ふじのめ学級の教職員が協力し合う体制が整っている。それぞれが研究大会を開催する場合には、小・中・ふじのめ学級の全校舎を利用したり、物品や会場を使用したりすることで、より効率的な運営に努めている。

ウ：研究内容の交流

それぞれの研究会に向け、事前に合同研究交流会を行っている。各研究部からの主張プレゼンテーションを見て、その内容について意見を交流する。毎回、活発な議論となり、「小学校で育む資質・能力がどう中学校につながるのか。」など、9年間の系統性について、議論が行われる。

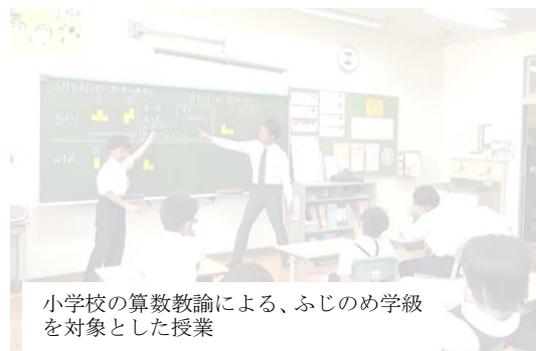
また、研究大会当日に向けたプレゼンの修正や研究の成果も明らかとなる。

その後、各教科・領域部会ごとに分かれて、指導案検討を実施。授業の課題や教材の特性等について、小・中・ふじのめ学級のそれぞれの立場からアドバイスし合う機会となる。



エ：異校種で授業を担当する

教員の専門性を生かし、別の校種の授業を担当する。中学校教員はその専門性の高さを生かして、英語や理科などで、小学生向け授業を行う。一方、ふじのめ学級においても、小中の通常学級の教員が教科の専門性を生かした授業を実施する。(内容は実践例を参照)



小学校の算数教諭による、ふじのめ学級を対象とした授業

なお、小学校教員が中学生向けに、どのような授業を実施するのかについては、現在の検討課題である。

教員は、違う立場の児童・生徒を相手にして授業を行うことで、他の校種の実態を肌で感じることができ、9年間の児童・生徒の発達の過程を知ることができる。

オ：研究主任会議

附属札幌学校の方向性を探るために、小・中・ふじのめ学級の研究主任が定期的に打ち合わせを行っている。各学校の児童・生徒の実態や発達段階などを交流しながら、9年間の接続を視点にした研究の在り方を模索している。

また、将来の研究の方向性や進め方や、附属学校の存在価値・在り方について、長期的な視野で話し合う場ともなっている。

② 児童・生徒の交流

ア：小・中学校とふじのめ学級

日常的に次のような機会を設定し、通常学級とふじのめ学級の児童・生徒の交流を行っている。

【小学校】

- ・朝の会に参加（合唱練習、行事連絡など）
- ・定期的な給食交流
（ふじのめ学級→通常学級、
通常学級→ふじのめ学級へ）
- ・命と安全を守る授業の参加（年4回）
- ・英語活動の参加（月2回）

【中学校】

- ・合唱祭に向けての合同練習
- ・給食交流
- ・昼休みにおけるレクリエーション活動



小学校とふじのめ学級合同の英語活動
(ALTが来校するときに合同で行われる)

イ：中学生が進める授業

小学生向けに中学生が進める授業を実施している。総合的な学習では、小学生の質問に中学生が答えるという活動を行



行った。小3の「どうすれば速く走れるのですか。」「字を上手く書く方法を教えてください。」などの質問に、中学生が図を使ったり体験活動を取り入れたりしながら、分かりやすく答える姿がみられた。

また、英語の学習では、5年生を相手に英語を使うロールプレイ活動を進めるなど、先輩後輩の関係を生かした授業を実施した。中学生にとって、相手意識を大切に活動の在り方を学ぶ学習となった。また、小学生が中学校生活に憧れを抱く機会となり、中1ギャップの解消にもつながる時間であった。（詳細は実践例を参照）

ウ：ふじのめ学級内の小中の交流

i) 小中合同の学校行事

ふじのめ学級では、同じ建物の中で小学生と中学生が生活している。この環境を十分に活かすことができる交流を充実するため、行事や日常の関わりにおいて、小学生と中学生が縦割りで行うことができる活動を計画的に実践してきた。

具体的な活動としては、【ふじのめ三大行事】と、月1回のペースで行う【朝会】、【給食交流】、【なかよしタイム】がある。いずれも、小学校1年生から中学校3年生までの児童・生徒が、6つの縦割りグループに所属して活動している(朝会については、学年単位で参加する)。



写真上：朝会（整列、礼をする場面）
写真下：朝会（お誕生日のお祝いコーナー）



ii) 活動のねらい

【ふじのめ三大行事】

- ・ふじのめなかよし交流会（6月）

お互いの顔と名前を知り、共に活動する楽しさを味わう。

- ・ふじのめ祭り（10月）

児童・生徒が共に取り組む活動を通して、お互いのよさを認め合って協力しながら、自ら進んで活動に参加しようとする態度を養う。

- ・ふじのめおわかれ交流会（2月）

お互いのよさを生かし楽しみながら活動することを通して人間関係を深めていく。

【朝会】

集団の一員としての自覚をもち、規律を守って落ち着いて参加しようとする態度を身に付ける。

【給食交流】

異学年の友達に自ら関わろうとする気持ちをもつ。

【なかよしタイム】

児童・生徒が自主性を発揮しながら取り組むことができる活動を通して、お互いをよく知り、共に活動する楽しさを味わう。



なかよしタイム

実践例紹介①

～小・中・ふじのめ学級の児童・生徒の交流及び共同学習にかかわる授業実践～

P. 14-P. 15 「小学校3年生と中学校1年生の合唱交流」音楽科	小学校～中学校
P. 16 「小学校3年生と中学校1年生の交流会」総合的な学習の時間	小学校～中学校
P. 18-P. 19 「Enjoy shopping at Fuzoku Shopping Arcade」外国語活動	小学校～中学校
P. 20-P. 21 「命と安全を守る授業」学級活動	小学校～ふじのめ
P. 22 「クリスマス会」生活単元学習	小学校～ふじのめ
P. 24-P. 25 「小学校、特別支援学級の交流学习」交流学习	小学校～ふじのめ
P. 26 「給食交流」給食	小学校～ふじのめ
P. 28-P. 29 「大地の成り立ちと変化」「動物の生活と生物の進化」理科	中学校～ふじのめ
P. 30-P. 31 「混声合唱を高めよう」音楽科・学級活動	中学校～ふじのめ
P. 32-P. 33 「合唱祭に向けての取組」交流活動	中学校～ふじのめ
P. 34 「からだ元気プロジェクト」食育	小・中・ふじのめ
P. 36 「ふじのめ祭り」縦割りグループ活動	ふじのめ（小・中）

連携実践例

小学校～中学校

音楽科

「小学校3年生と中学校1年生の合唱交流」

授業日：平成29年10月13日

児童：小学校3年生 生徒：中学校1年生

場所：小学校実習生室

指導者：谷坂俊典 渡辺景子 瀧ヶ平悠史 山口修司

1 経緯

附属札幌小学校では學藝会において、小学3年児童が音楽表現を演目として発表している。また、附属札幌中学校では合唱祭（コンクール）があり、各クラスで歌唱表現に取り組んでいる。學藝会と合唱祭の日程が近いため、この時期はお互いに練習する音が日常的に遠くから聞こえてくる。そのようなお互いの取組を意識し、音楽を感じられる環境にある。

本実践では、山崎朋子作詞作曲の「大切なもの」を小学3年児童と中学1年生徒が上記のそれぞれの行事で歌唱することがきっかけとなり、交流することで互いに学び合えることが多くあると考え、小学校と中学校の2学級による合唱交流会を行った。

2 授業の実際（活動の実際）

「大切なもの」は元来、中学生を対象とした合唱曲である。しかし、メロディーに説得力があったり、歌詞の内容が小学生にも理解、共感できるものであったりするため、小学生でも感情移入しながら歌唱することができる楽曲である。発達段階を考え、小学3年生には斉唱でメロディーを歌唱するよう指導した。また、中学生は混声三部合唱で歌唱していた。

実際の交流場面では、小学3年児童が斉唱で歌唱し、中学1年生徒が鑑賞する活動をした。小学生は、中学生から「声が揃っていてすごくいいね」、「声がきれいで素敵だね」、「一生懸命歌っている姿に感動したよ」などと声をかけてもらったことで、うれしそうな表情を浮かべたり、自信をもったりする様子がみられた。

その後に、中学生が混声合唱を歌唱し、小学生が鑑賞した。小学生からは「声の響きが全然違う」、「私たちの半分しか人数がないのに、声の大きさがすごい」、「全員で一つになれていて感動した」などと感じたことを素直に伝えていた。中学生は、今まで自分たちの力で練習してきた成果を確信し、うれしそうな表情をみせていた。

互いに歌唱し合った後に、小グループに分かれ、「大切なもの」をよりよく歌唱するためのポイントを中学生から小学生に伝える活動を行った。グループ毎に声の出し方のポイントや、フレーズやブレスを意識して歌唱することの大切さ、基礎的な発声の仕方を教えていた。小学生は、憧れる中学生と一緒に



声を出して練習することで、その技能を大きく伸ばしていく姿がみられた。中学生にとっては、これまでの経験や知識を総合して伝える活動をすることで、経験や知識をより確かなものになっている姿がみられた。

最後に中学生の指揮とピアノに合わせ、全員で合唱する活動を行った。小学生と中学生の声が混ざり合い、初めてお互いに歌唱したものよりも、表現豊かに響き渡る合唱をすることができた。

3 授業を終えて（活動を終えて）

自然と音が聞こえてくる環境や、合唱交流を行うことのために柔軟に対応できる教員間の連携があつてこそこの活動であった。児童・生徒は日常の学習から得られたものを発揮しながら、合唱交流の場を通して、さらなる歌唱技能の向上や「もっと上手に歌いたい」という意欲の向上につなげることができた。同じ曲だからこそできた取組であるが、今後は意図的に同じ楽曲を扱い、互いに得られるものが多い合唱交流の姿を目指していくこともできると考えている。



連携実践例

小学校～中学校

総合的な学習の時間

「小学校3年生と中学校1年生の交流会」

授業日：平成27年10月23日

児童：小学校3年生 生徒：中学校1年生

場所：中学校体育館

指導者：伊藤雄一、長谷川英和、細川朝子

高橋健一、樋渡剛志

1 経緯

本校では、中学校と小学校の連携教育の一環として、「悩みを解決」という課題のもと、小学3年生の悩みを中学1年生が解決する交流会を行った。この学習では、次に示すねらいを設定した。

<中学生>

関わりが少ない異年齢集団との交流を通して、総合的な学習の時間「ベース」や教科の学習で学んだことを活用することの難しさや大切さを実感し、「人間関係形成力」「情報活用能力」、「日々の学び」の重要性に対する理解を深める。

<小学生>

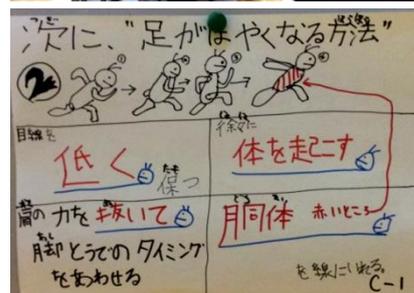
中学生と交流することで、中学生のことや上級学校の学びに対する憧れをもつ。

2 授業の実際（活動の実際）

交流当日は、中学生が小学生を迎えに来るところから始まった。中学生が小学生を整列させ、中学校体育館に連れていくなど、会の進行をしていった。

交流会においては、中学生が自分たちで会を進め、「この質問を書いてくれた人は誰かな。」「みんななら、どうしたら解決できると思う。」などと、問いかけながら交流会を進めていた。事前に小学生が書いた悩みに中学生が、身振り手振りを加えたり実物例を提示したりして説明していた。小学生が理解しやすいように、準備をしていた。

交流会の最後には、小学生の新たな質問を聞く場面を設けていた。想定していなかった質問にも、中学生自らの経験や考えを交えながら答える姿がみられた。



3 授業を終えて（活動を終えて）

授業後には「ぼくたちの悩みを調べて答えてくれた中学生に感謝したい。」や「私たちが中学生になった時も、小学生に優しく教えてあげられるようになりたい。」と振り返っていた。小学生は悩みを解決してもらえた喜びと、自分たちではなかなか解決できなかった悩みを解決してくれた中学生へ憧れをもっていた。

中学生にとっては、小学生に分かりやすく伝えるという相手意識をもって取り組む姿がみられた。相手意識をもって情報を提供するためにはどのようなことが必要なのか、新たな課題を見いだすきっかけの時間となった。

連携実践例
小学校～**中学校**
外国語活動

「Enjoy shopping at Fuzoku Shopping Arcade」

授業日：平成 28 年 10 月 13 日
児童：小学校 5 年生 生徒：中学校 2 年生
場所：中学校実習生室
指導者：柏 敬太 佐々木 歩

1 経緯

本学は平成 25 年度より文部科学省による研究開発指定を受け、外国語の指導を充実させてきた。その一環として、小学校と中学校の習得している表現の違いを生かし、双方にとって学びのある交流を行いたいと考えた。そして、そのような交流を行うためには、小学生・中学生双方が課題意識をもち、互いにとって新たな学びとなるような目標、学習課題、学習活動を設定したりする必要があると考えた。そこで、小学生、中学生それぞれに対して次の目標を設定し、交流を行った。

題材の目標（小学生）

- ・英語でのコミュニケーション活動において、初対面や異年齢の相手に対しても積極的に話したり聞いたりしようとしている。【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】
- ・分からない単語について、相手にたずねることができる。【外国語表現の能力】

題材の目標（中学生）

- ・言い換えやジェスチャーなど、小学生に伝わりやすい工夫をして説明しようとしている。【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】
- ・言い換えを効果的に用いながら、道案内や商品の販売を行うことができる。【外国語表現の能力】

2 授業の実際

道案内、買い物の学習活動では、目的の売り場を尋ねなければいけない仕掛けを設定した。具体的には、児童に架空の所持金を設定するとともに、店によって扱う商品や値段を変え、購入する複数の商品について、それぞれ金額の安い店から購入しなければ予算内に必要な商品を買いきることができないような教材を作成した。こうすることで、売り手、買い手として英語を必然的に使用することとなるだけでなく、「予算内で買い物を行う（行ってもらう）には、どのような工夫ができるだろうか」という課題を共有することができた。その上で、中学生と小学生で分かれ、中学生は伝え方の工夫、小学生は尋ね方の工夫を考え、共有する時間を設けた。中学生は「Go straight. Turn right. You can buy a cake.」のように文章を分けたり、「Shop A is a vegetable shop, too.」のように言い換えたりするなどの工夫をして伝えることができた。また、小学生は「I want～. や How much is it?」などの既習表現を活用しながら買い物を行うことができた。

3 授業を終えて

成果として、小学生、中学生で異なる役割をもつような学習とすることで、既習内容の差を生かし、双方にとって学びのある授業を行うことができた。小学校・中学校ともにメリットのある学習であるため、効果的な小中連携の在り方として有効な取組であった。今後の課題として、研究開発指定が終了した後も継続的にこの実践を行うため、新学習指導要領における外国語活動および外国語科で学ぶ表現を用いることができるような教材へと修正を行う必要があると考えている。

資料 本時指導案

本時の目標

- (1) 言い換えやジェスチャーなど、小学生に伝わりやすい工夫をして説明しようとしている。
- (2) 言い換えを効果的に用いながら、商品の販売や道案内を行うことができる。

展開 (2、3/3) ※2 時間構成。交流時間 85 分、移動 5 分、片付け・振り返り 10 分

流れ	○生徒の学習活動	・教師のかかわり
迎える (10分)	○グループ毎に集合する。 ○小学生を迎える。	・迎える姿勢をつくれているか確認するように促す。
出会う (20分)	○教師による自己紹介、説明を聞く。 ○交流する小学生を自分のグループに招く。互いに自己紹介を行う。 *自己紹介を兼ねたアイスブレイク(他己紹介、共通点探しなど)	・司会の指示がうまく伝わっているか各グループを確認する。 ・アイスブレイクが停滞しているグループに関わり、紹介を促す。
見通しをもつ (30分)	○タスクのゴールを聞き、内容を理解できているか小学生に確認する。	・タスクのゴールを小中学生に伝える。 ・返品が可能であることを伝える。
演じる (45分)	○教師のデモンストレーションを見る。 ○それぞれの持ち場につき、店員として活動を行う。 *Would you like some help?では伝わらない。 *小学生が所持金で買い物を終えるにはどうすればいいだろう。	・教師によるデモンストレーションを行う。 ・各グループをまわり、準備ができているか確認する。 ◆小学生に伝わりやすい工夫をして説明しようとしていたか。 ・うまく説明できていないグループにジェスチャーの援助を促す。
共有する (55分)	○活動を終えた感想を交流する。 【学習課題】 予算内で買い物を行ってもらうには、どのような工夫ができるだろうか ○課題に対する工夫を交流する。 *ジェスチャーを交えながら left/right を使った。 *同じ商品を売っている店を伝えたらどうか。	・1 回目の活動を終えた感想を共有する。 ・小中学校で分かれて集まるように指示を、伝わりやすかった表現を共有する。
活用する (72分)	○再び活動を行う。 *Go straight. ○○is on the left. Turn left. * Go straight and turn right. You can buy candles.	・再度活動を行うことを伝える。 ・買い物を終えた小学生には、追加の課題を与える。
振り返る (85分)	○感想を交流する。 <課題を解決した姿> 近くにいる仲間で伝え、ジェスチャーを含めた言い換え、相手に分かりやすく説明することができた。	◆言い換えを効果的に用いて、道案内や商品の販売を行うことができたか。 ・交流会の評価を行う。

評価

言い換えやジェスチャーなど、小学生に伝わりやすい工夫をして説明しようとしていたか、また、言い換えを効果的に用いながら、商品の販売や道案内を行うことができたか、活動の様子から見とる。

連携実践例

小学校～ふじのめ
学級活動

「命と安全を守る授業」

授業日：平成 30 年 6 月 18 日

児 童：小学校・ふじのめ学級全児童

場 所：小学校各教室

指導者：小学校・ふじのめ学級全担任

1 経緯

本校で継続して実施してきた「命と安全を守る授業」は、平成 27 年度より「防犯」「火災・地震・津波などの災害」「交通安全」「事故やけが」「いじめ」とテーマを 5 つに増やし、1・2 学期に 2 回ずつ、3 学期に 1 回行っている。この授業では、次の 3 点をねらいとして設定している。

- ・学校内外での自分自身や友達、家族の安全・安心の充実と向上をめざす。
- ・データや資料、体験活動などを通して安全について考え、その考えをもとに、自分の行動を判断することができる。
- ・危険予知、危険回避能力、安全に対する技能を身に付けて実践することができる。

また、ふじのめ学級の子どもたちも、それぞれの交流学級で授業に参加している。小学校の子どもたちにとって、ふじのめ学級の友達と一緒に考えたり活動したりする貴重な機会であり、「命と安全を守る授業」がある日を楽しみにしている子どもも多い。

2 授業の実際（2 年生の例）

2 年生の「交通安全」の学習では、自転車に関連する交通ルールを示したイラストを見ながら、安全な自転車の乗り方について考えた。2 年生では、日常的に自転車に乗っている子どもが多く、普段から気を付けていることについてペアで話し合ったり、全体で交流したりしながら、自転車に乗るために守らなければならないルールがあることを確認していった。特に、左側通行することや車道の端を走ることなど、子どもたちの知らなかったルールについて詳しく取り上げることで、その理由や必要性を考えさせ、「全てのルールは乗っている人も周りの人も怪我をしないためにある」ということに気付かせていった。また、「自転車は車の仲間」だということを改めて認識した子どもたちは、自転車に乗る人も歩行者も安全であるために、様々な状況で起こりうる危険について予想しながら回避し、責任をもって運転する必要があると感じていた。



3 授業を終えて（2 年生の例）

授業の振り返りでは、「公園で乗る時にも、歩いている人がけがをしないように道の端を走る」、「危ない時すぐにブレーキをかけられるように、きちんとハンドルを握る」など、授業では触れていない事柄についても、安全に自転車を運転することを意識している意見が多く出てきた。身近な話題であるため、どちらの学級の子どもたちも、経験を基に、イラストを見ながらペアで考えを伝え合ったり、挙手して発表したりと、積極的に意見を出し合いながら学習に取り組んでいた。低学年の交流授業として、話し合うことを主体として問題を解決していく授業は「命と安全を守る授業」のみのため、お互いの姿が刺激となり、より活発に交流する様子がみられた。

資料1 命と安全を守る授業 年間カリキュラム (平成27年度作成)

平成27年度北海道教育大学附属札幌小学校

防犯・安全カリキュラム

安全・防犯教育でめざす子どもの姿

学校内外や自分自身や友達、家族の安全・安心の充実と向上をめざす
データや資料、体験活動などの通して安全に対して考え、その考えをもとに、自分の行動を判断することができる
危険予知、危険回避能力、安全に対する技能を身に付けて実践することができる

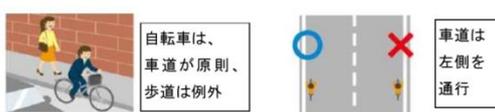
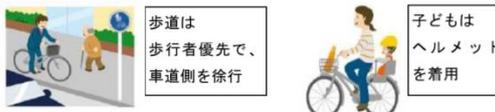
	防犯について	火災・地震・津波などの災害	交通安全	事故やけが	いじめ
1年生	知らない人に声をかけられたり、車から声をかけられたときにどのように行動するかを考える	地震とは、どのような災害なのかを知り、どのように行動するかを学び災害に備える	安全なバスや地下鉄、JRのり方	学校のルールを知る 休み時間	仲直りすることの大切さを知る
2年生	危険な場所や状況を知り、どのように行動するかを考える	火災とはどのような災害なのかを知りどのように行動するかを学び災害に備える	安全な道路の歩き方	学校のルールを知る 給食・そうじ	いやな思いをした時にどうするかを考える
3年生	誰もいない家へ帰る時や一人で留守番をするときに気を付けることを考える	家の中で、地震が起こった時の危険を考え、どのように行動するかを話し合い災害に備える	安全な自転車ののり方	公園や家の前での遊び方	具体的な例から仲間はずれについて考える
4年生	個人情報などを聞き出そうとする不審電話への対応を考える	通学中に地震が起こった時の危険を考え、どのように行動するかを話し合い災害に備える	雪道・雨の日の安全	校内のけがや事故の状況を知りこれからの行動を考える	具体的な例から見て見ぬふりについて考える
5年生	インターネットや携帯電話の使い方を考える	地震が起こった際に、津波が起こることを知り、どのように行動するかを話し合い災害に備える	道路へのとび出し(交通事故1位)の危険を考える	応急処置の仕方	いじめとは、どんなことか考える
6年生	最高学年として、下級生のことも考え登下校できるように視野を広げ、これからの自分の行動の仕方を考える。	最高学年として、地震や火災などの災害が起こった際にどのように行動するかを話し合い災害に備える	登下校の危険な場所を話し合い、1年生に知らせよう	行内外で、事故やけがに合った人がいた時の対応	メールやLine、掲示板の使い方からいじめを考える

資料2 本時指導案

第2学年 安全学習指導案

1学期

1. 題材名 安全な自転車の乗り方
2. 本時のねらい 自転車安全利用五則の内容を知り、できていることとできていないことを明らかにすることで、安全に自転車を利用しようとすることができる。
3. 学習展開

学習内容・活動	留意点
<p>○どんな交通ルールのことを言っているイラストか分かるかな。</p>  <p>自転車は、車道が原則、歩道は例外</p> <p>車道は左側を通行</p>  <p>歩道は歩行者優先で、車道側を徐行</p> <p>子どもはヘルメットを着用</p> <p>※警視庁ホームページ「自転車は車のなかま」より</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自転車の交通ルールを見ることで、知っていて守っていること、知っているけど守っていないこと、知らなかったことを明らかにし、守らないことがどんな危険をもたらすのかについて目を向けられるようにする。
<p>自転車に乗っているとどんな危険があるのだろうか</p> <p>○次のどんな運転が危険なのかな。</p>  <p>二人乗り 並走 信号無視</p>  <p>一時停止無視 夜間無灯火</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・安全運転のためのルールを見て、どこが危険な理由を考えることで、自転車も車両の一部であることに気付けるようにする。
<p>これらを守らないとどんなことになるのだろうか？</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>自転車って「車」と同じ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・車と同じルール ・歩道を渡れるのは特別 ・ヘルメットで安全に </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>交通ルールを守って安全に</p> <ul style="list-style-type: none"> ・信号や標識を見よう ・歩いている人や車にぶつからないように </div> </div> <p>自転車は車に乗ると同じルールを守らないといけないんだ。 歩行者のことを考えて安全に乗りたいね。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・正しい自転車の乗り方を実行するために、すぐにできそうなことを取り上げ、日常の運転を見直すことができるようにする。

連携実践

小学校～**ふじのめ**

生活単元学習

「クリスマス会（第1部）」

授業日：平成 29 年 12 月 21 日

児 童：ふじのめ学級全児童

場 所：ふじのめ学級体育館

指導者：小田有佳里 平山一馬 八島奈央 山崎貴博

1 経緯

ふじのめ学級（小学校）では、12月にクリスマス会を行っている。クリスマス会は、2部構成となっており、第1部は各学級の出し物発表、第2部はゲームや歌、会食等を行っている。毎年、第1部の出し物発表には、交流学級の児童や教師、校長先生、副校長先生、保護者の方など、多くの人に招待状を渡して観に来ていただいている。当初は、通常の学級の3年生が、総合的な学習の時間の「交流学習」の一環として見学に来ていた活動が少しずつ広がり、現在では全ての学級で開催されている。

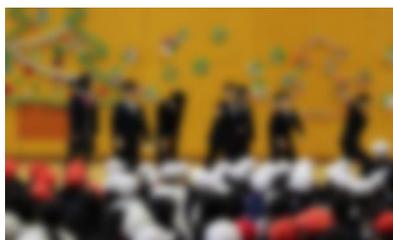
2 活動の実際

クリスマス会に向けての準備では、どの学級でも、観に来る友達を楽しませたいという気持ちをもって、一生懸命装飾を作ったり、出し物練習をしたりする児童の姿がみられた。特に中高学年では、自分たちの出し物や司会の仕事などについて、「どうしたら今よりもよくなるのか?」、または「盛り上げられるのか?」といったことについて友達と意見を出し合いながら考えたり、自分たちで進んで取り組んだりする姿がみられた。

クリスマス会本番では、どの学級の児童もこれまでの練習の成果を十分に発揮し、友達と楽しみながら演じたり、踊ったりすることができていた。最後まで自分たちの力でやり遂げられたことを喜ぶ姿が多くみられた。

3 活動を終えて

クリスマス会第1部では、自分たちの発表に対して、交流学級の友達や教師、保護者の方など、多くの人たちから、たくさんの拍手や感想をいただくことができた。そのことが、自分たちの力でできたことへの実感をさらに高めることにつながったのではないかと考えている。また、交流学級の児童にとっても、ふじのめ学級の児童の頑張る姿、生き生きと表現する姿を観ることは大きな意味があったのではないかと考える。障がいの有無にかかわらず、一人一人が自分の力を発揮できることや、互いのよさを認め、尊重し合うことなどの大切さに、子どもたちが自ら気付いていくためにも、今後もこのような取組を継続していきたいと考えている。



連携実践例

小学校～**ふじのめ**

交流学習

「小学校、特別支援学級の交流学習」

児童：ふじのめ学級全児童

指導者：平山一馬 小田有佳里 八島奈央
各交流学級担任

1 経緯

本校では、交流活動として各学年の現地学習や、5・6年生夏の学校など、一緒に学習する機会を設けている。交流および共同学習の充実においては、以下を基本的な考えとして捉えている。

- ・特別支援学級があることよさを生かし、双方の児童にとって望ましい交流活動、学習活動を推進する。

障がいのある子どもたちにとって

- ・生活や学習の経験を広げる場
- ・体験的に社会性を高める場
- ・対人関係をつかみ、高める場

心の涵養

通常の学級の子どもたちにとって

- ・障がいへの認識、理解、共感を生む場
- ・他者へのかかわり、思いやりを高める場
- ・対人関係を広げ、深める場

<すべての子どもにとって思いやりのある人間性や豊かな社会性がはぐくまれる>

2 活動の実際

通常の学級とふじのめ学級が一緒に取り組んだ活動内容を以下に示す。

3年生：西山製麺工場見学

4年生：学校宿泊、発寒清掃工場見学、青少年科学館見学

5年生：小樽夏の学校、現地学習（植物工場）

6年生：函館夏の学校、心の劇場、kitara ファーストコンサート ※平成30年度

活動内容は通常の学級と同じである。学年や学級で活動する際には、ふじのめ学級の児童は、各交流学級に入って取り組むことが多い。5～6人の小グループを編制して取り組む活動においては、ふじのめ学級児童でグループになったり、交流学級のグループに加わったりなど、児童の実態や学習のねらいに合わせて対応している。係活動がある場合には、どの係に属するのかについて、事前に通常学級の担任とふじのめ学級の担任とが話し合い、双方の児童にとってよりよい学びとなるよう、分担や係の活動内容を考え決めている。



活動で使うしおりは、通常学級の児童と同じものを使用する。しかし、写真などを使って具体的なイメージをもちやすくしたり、詳しく書かれたしおりをふじのめ学級児童用に作成して予定を確認したりす

るなど、事前学習の内容は、児童の実態を踏まえて、各担任で取り組んでいる。

通常学級とふじのめ学級との日常的な交流では、活動内容は同じであるが、ねらいがそれぞれ異なる。双方の児童にとって望ましい交流となり、学びを深められるよう、事前学習や当日の活動など、担任間で話し合いながら活動を進め、取り組んでいる。

3 活動を終えて

夏の学校などにおける係活動では、通常学級の児童と係の活動内容を話し合ったり、実際に役割分担をしたりして取り組む中で、互いに思いや考えを伝え合う機会にもなっている。そのような交流を積み重ねていくことは、他者の理解、そして自己の理解にもつながるものと考え。学習する場やねらいが違っていても、同じ活動と一緒に取り組んだり体験したりすることは、どの児童にとっても有意義な学びとなることと考える。今後も、通常学級とふじのめ学級双方の児童が、認め合い、理解し合いながら学ぶ機会となるよう、全ての教員で見守り、応援していきたいと考える。



連携実践例

小学校～ふじのめ

給食交流

「給食交流」

授業日：毎週火曜日・水曜日

児童：ふじのめ学級・小学校全児童

場所：ふじのめ学級・小学校各教室

指導者：全担任

1 経緯

給食交流は、通常の学級の児童とふじのめ学級の児童の交流の場をより一層増やしていくために、ふじのめ学級の児童が、自分の交流学級で給食を食べることから始まった。平成 25 年度からは、ふじのめ学級の児童が交流学級に行くことに加え、ふじのめ学級に交流学級の児童が来て、一緒に食べる形を低学年からスタートした。その後、中高学年にも広がり、現在では 1 年間を通して交流学級の全児童がふじのめ学級で給食を食べられるように計画を立てている。ふじのめ学級では、交流給食のねらいを以下のように設定している。

- ・いろいろな人たちと一緒に食事をするを通して、マナーや気軽なコミュニケーションの方法を身に付ける。
- ・給食の準備や片付けなどの係活動を一緒に行うを通して、自分の役割を自覚し、責任をもって行動する力を身に付ける。

2 活動の実際

現在、毎週火曜日と水曜日を基本として、給食交流を行っている。

毎週火曜日には、小学校の児童 6 名程度がふじのめ学級の各教室に来て、給食を一緒に食べている。ふじのめ学級の児童は、交流学級の友達に来てくれることを楽しみに、友達を迎える準備を行っている。給食中は、共通の話題で盛り上がり、行事が近い時にはお互いの様子を報告したりするなど、会話を楽しみながら食べる姿がみられる。また、小学校とふじのめ学級の校舎が離れているため、小学校の児童がふじのめ学級まで来る機会は少ない。そのため、交流に来た児童は、「ふじのめ学級の教室は、こんな感じなんだ。」「生単ってどんな勉強をするの?」と質問をする姿がみられるなど、ふじのめ学級について知るよい機会となっている。

毎週水曜日には、ふじのめ学級の児童がそれぞれの交流学級で、給食を食べている。いつもと違う大人数での給食に、ふじのめ学級の児童は緊張する様子もみられるが、交流学級でのルールや自分の役割を確認しながら一緒に活動を進めようとする姿がみられている。こちらの交流でも、いろいろな友達との会話を楽しむ様子がみられる。



3 活動を終えて

交流給食では、給食の時間を共にすることで、子ども同士の気軽な関わりが増え、お互いのことをより理解する機会となっている。今後も、継続した取組を行い、お互いを認め合いながら、関わりを広げていけるようにしていきたい。

連携実践例

中学校～ふじのめ

理科

「大地の成り立ちと変化」(中学校1年生)

「動物の生活と生物の進化」(中学校2年生)

授業日：中学校1年生9月 中学校2年生5月

生徒：中学校1年生 中学校2年生

場所：石狩～厚田 円山動物園

指導者：小路美和 山田浩之 山口 翔 中禰真介

山田明夏 渡邊道人

1 経緯

理科では、第1学年の「大地の成り立ちと変化」と第2学年の「動物の生活と生物の進化」の単元で、実際の地層や動物の観察を通して、自分たちが住んでいる札幌の成り立ちや生きていくための動物のからだの仕組みに興味や関心をもち、探究していくことへの意欲を高めることを目的に、野外巡検と動物園学習を実施している。ふじのめ学級(D組)の生徒もこの活動に参加している。特別支援学級のカリキュラムに理科は入っていないが、実際の地層や化石を見たり、動物を観察したりすることを通して、自分が住んでいる地域や身近な動物に興味や関心をもち、課題について調べようとする意欲を高めることをねらいとしている。

2 授業の実際

<事前>

野外学習や動物園学習を行う前には、事前のオリエンテーションを行っている。中学校の理科教師がD組の教室を訪問し、1時間の授業を設定し、学習の目的や当日の持ち物、服装などを説明した。D組の生徒の中には、化石や石などに興味があり、多くの知識をもっていたり、自宅で動物を飼っていて、動物を身近な存在と感じていたりする生徒も多い。生徒たちの興味や知識を引き出しながら、科学的に観察する視点について説明した。



【事前のオリエンテーション】

<野外学習>

野外学習では、私たちが住む札幌がどのようにできたのかを確かめるために、手稲山を観察したり、紅葉山砂丘と石狩砂丘から砂を採取し、その違いを調べたりした。色や粒の大きさの違いから、どちらが古い地層なのかを考えることができた。

次に、無煙浜に向かい、石油自噴跡を観察した。石油特有のにおいをかぎながら、車の

9:00	附属中学校出発(大学バス)
9:15	紅葉山砂丘 石狩放水路[河跡湖]
9:45	石狩浜(石狩砂丘) 聚富団地、知津狩[海岸段丘]
10:20	無煙[石油自噴跡]
10:40	無煙浜[地層・ノジュール観察、化石・メノウ・石炭・砂鉄採集]
11:45	厚田[不整合]
12:35	附属中学校着
12:45	学習終了

ガソリンに使われていたり、身近なプラスチックの原料に利用されたりしている石油が湧き出ている様子を観察することは、生徒にとって大変興味深いものであった。最後は、無煙浜を30分かけて歩きながら、地層の観察をした。日常生活では地層を観察する機会が少ないため、その大きさに感動する生徒が多かった。また、石を割って中に含まれる化石を見つけたり、海や海岸にあるメノウや石炭を採取したりした。時間を忘れ、夢中になって採取する生徒の姿があった。



【地層の観察】



【石油自噴跡の観察】



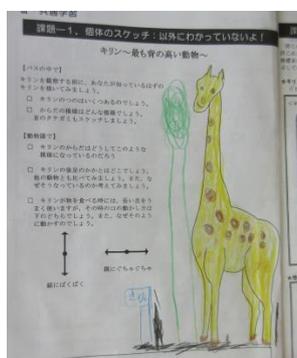
【ハンマーを用いて石を割る】

<動物園学習>

事前学習として、キリンのスケッチを行った。一度は見たことがあるにも関わらず、いざ描いてみると「どのような模様であったか」「角やしっぽはどのようになっているのか」など曖昧な点が多いことに気が付いた。その後、動物園では、自分のスケッチと本物のキリンを比較しながら、体のつくりについて観察した。また、なぜこのようなつくりになっているかを全体で考えながら観察することを通して、「科学的な視点で動物を観察すること」ができるようになった。

その後、A～C組の生徒は個別探究学習、D組の生徒はグループ探究学習を行った。自分たちで調べたい動物を決めたり、「食べ方」などの一つの行動をいろいろな動物で比較したりするなど、個々の探究テーマに基づいた観察を科学的な視点から行った。D組の生徒たちも事前学習の際に「いろいろなクマのつくりを比較する」「レッサーパンダの生活の仕方を観察する」などのグループテーマ決め、探究することができた。

9:00	附属中学校出発(大学バス)
9:50	円山動物園着、ガイダンス
10:00	集団見学開始(骨格標本の比較 キリンの観察)
10:40	個別・グループ探究課題学習開始
11:40	正門前集合・バス乗車
12:30	附属中学校着
12:45	学習終了



【事前にキリンを描き、実際の様子を観察しながら比較する】

3 授業を終えて

A～D組の生徒たちが、学年の仲間と一緒に学ぶ機会があることは、とても価値があることであった。また、D組の生徒たちにとっても次のような成果があった。

- 特別支援のカリキュラムにはないが、理科を学べる機会があることに意義がある。中学校の理科の専門教員の授業を受けることや、実際に参加し疑問を解決できることを楽しみにしている生徒も多い。
- 特別支援学級の生徒たちにとって、実際の場所について、学んだことを目で見たり、確かめたりできることは、学ぶ方法が分かりやすく、知識などが定着しやすい。また思考するためにも実際に見て経験することは効果的である。
- 動物園学習では、専門的な学びがあり、見方が深まったことで動物に興味をもつ生徒が増えた。
- 野外巡検では、苦労しながらも実際に見て興味がわいたからこそ、メノウなど石の名前を聞いて、記憶している生徒が多かった。

なお、このような野外巡検や動物園学習が実施できる大きな要因は、大学バスを計画的に利用できる点である。附属学校として、この恵まれた環境に感謝し、それを活用しながら今後も継続していきたい。

連携実践例

中学校～ふじのめ
音楽科・学級活動

「混声合唱を高めよう」

授業日：平成 30 年 11 月 2 日
生徒：中学校 3 年 C 組、ふじのめ学級 D 組（全学年）
場所：中学校体育館、格技室、ランチルーム
指導者：渡辺景子 山田明夏 田口 祐弥

1 経緯

合唱祭の学級合唱曲、3 年 C 組「証」とふじのめ学級（D 組）「君をのせて」を題材に取り組んだ。

合唱祭の活動においては、時間割や授業場所などが別々であるため、環境的な要因により特別支援学級と通常学級との関わりが希薄になってしまうことが本校の課題として挙げられる。そこで、昨年度は 2 年 B 組生徒が D 組合唱曲の伴奏を担当したことをきっかけに、通常学級と D 組との合唱交流や給食交流を試みた。この交流は同じ学校の仲間であるという意識を高めるきっかけとなっただけでなく、合唱祭当日までによりよい合唱を披露したいという意識を高めることにもつながったため、相互により影響を与え合った取組であった。

平成 30 年度は、そのような取組をさらに発展させるために、互いの合唱を聞き合うだけでなく、D 組の合唱曲を合同で練習する機会を取り入れた授業を試みた。



2 授業の実際

D 組の合唱曲「君をのせて」は、男声が 2 パートに分かれる

混声三部合唱である。D 組の実態として、各パートの人数が少ないことや、どのパートにも主旋律が現れることから、副次的旋律を歌う際は他のパートにつられてしまうなど、全員が自信をもって歌うことが難しい状態であった。一方、3 年 C 組の合唱曲「証」は難易度が高く、自分が歌うことで精一杯な面があり、お互いのパートの役割が理解できないため、曲全体のバランスが取れないことが課題であった。そこで、D 組生徒には自信をもたせるため、3 年 C 組生徒には新たな視点で合唱曲を捉えるために、お互いの声を聞きながら一緒に歌う時間を多く作ることを意識して授業を構成した（資料 1）。

資料 1 授業の日程

時間	○3 年 C 組生徒の学習活動 ●D 組生徒の学習活動	・教師のかかわり
13:40	○教室にて「君をのせて」の練習	・D 組が使用している楽譜とパート練習用 CD（自作）を用いて練習し、声部の役割や難しい点を確認するよう促す。
13:50	○●体育館整列完了、発声練習	・両学級で取り組んでいるものを取り上げる。
14:00	○3 年 C 組「証」の発表 ●発表を聴き、感想を発表する。	・合唱祭本番の動きを意識するよう促す（事前に学年でのリハーサルを行っているため）。
14:07	●D 組「君をのせて」の発表 ○発表を聴き、感想を発表する。	・ステージ練習が初めてとなるため、ステージの出入り等の動きを確認する。
14:15	○●「君をのせて」の合同パート練習 A パート（女声）：体育館 B パート（男声高音）：格技室 C パート（男声低音）：ランチルーム ○●パート練習の成果と課題、感じたことを交流する。	・各パートの実態に応じて、ピアノを弾く、一緒に歌う、D 組の困っている点を出し合う等、パート練習を補助する。 ・3 年 C 組生徒には、新たな曲に取り組んで気付いたこと、自学級の合唱曲に活かそうなことを見付けるよう促す。
14:30	○●体育館に集合し、「君をのせて」を全員で合唱する。	・D 組生徒には、最初の発表から変化した点や 60 名の合唱の響きに注目するよう促す。
14:35	●D 組指揮者より、授業の振り返りとまとめ	

A・Bパートのパート練習については、教師主導で行った。お互いの声がよく聞こえるように、D組生徒と3年C組生徒が交互に並ぶようにする、向かい合わせにするなど工夫した。また、D組生徒が苦手としている副次的旋律の部分について、自信をもって歌えるように繰り返し練習を行った。D組生徒は、少人数ではできなかった、声が混ざって響き合う感覚を身につけられたようである。また、3年C組生徒は「ここはBパートが主旋律だから、もっと声を出した方がいい」「女子に裏メロがあるから、きれいに歌いたい」と、よく知っている曲だからこそ、声部の役割に着目しながらパート練習に取り組み、歌唱表現に対する思いや意図をもつことができた。

Cパートについては、3年C組のバスパートリーダーがパート練習を進行した(写真)。D組発表の様子や、事前の練習から難しい箇所を見つけ、「練習する前よりよくなった」と励ましながら練習を進める様子は、これまでの学習が活かされた場面であると同時に、D組パートリーダーにとって、よいモデルとなった。

最後に行った60名での合同合唱は、どちらの学級の生徒も自信をもって歌っており、非常に迫力のあるものになった。

両学級の生徒にとって、一人一人が自信をもって声を出すことが、3パートの重なるの面白さや、響き合うことのよさ、合唱の楽しさにつながると気付くことができた、よい機会となった。



3 授業を終えて

D組では、当日の直前練習において、パートリーダーから「場所を分けてパート練習をしたい」という要望や、指揮者から「輪になって、お互いの声を聞きながら歌おう」という提案があった。合同授業で行ったパート練習の効果を自分たちなりに感じており、練習方法の幅が広がった。3年C組では、新しい教材に取り組むことで、対旋律を担当する難しさや、旋律を歌う楽しさや重要性を改めて実感すると同時に、それぞれが調和したときに声量が増し、表現の幅が広がる可能性があることに気付いた。さらに、「君をのせて」では声量が出たのに「証」では同様に声量や迫力を出せないのはなぜかと比較して考え、リズムの細かさや歌詞の発音に課題があることに気付き、速度を落として歌うなど練習方法を工夫する姿が見られた。合同授業の内容が活かされており、相互により影響を与え合ったものと言える。

合唱祭翌登校日の学活で、D組では小学生との交流会を開くことになった(写真)。3年C組は合唱祭の振り返りの時間であったが、交流会に参加して「君をのせて」を一緒に合唱しないかという提案をした。「小学生に聞いてもらうなら、自分たちもしっかり歌わなければいけない」と、交流会に参加する前に練習したいという声があがり、急遽音楽室で練習を行ってから交流会に向かった。その後も、D組からのお礼のメッセージカード、D組の伴奏を担当した3年C組生徒からの手紙の交換など、交流が継続した。これらの活動を通して、お互いの合唱を認め合い高め合えたこと、それぞれのよさを取り入れ自分たちの合唱に活かしたこと、合唱祭が終わっても「みんなで一緒に歌おう」という気持ちになれたこと、感謝の気持ちをもち表現できたことが大きな成果であった。



連携実践例
中学校～**ふじのめ**
交流学習

「合唱祭に向けての取組」

授業日：平成 30 年 11 月 3 日
生徒：ふじのめ学級 D 組（全学年）
場所：ふじのめ学級体育館、附属中学校体育館等
指導者：山田明夏 渡邊道人 各交流学級担任

1 経緯

本校では毎年、中学校全体で合唱祭を行っている。この行事では、次に示すねらいを設定している。

- ・互いの努力を認め合うことを通して、集団としての連帯感を高めることができる。
- ・異学年との関わりを大切にすることで、附中の伝統を言葉や姿で伝え、受け取ることができる。
- ・合唱づくりをすることを通して、学年や学級の仲間と協力して物事を成し遂げるよさを確認したり、理解したりするとともに、よりよいものを作り上げる充実感を得ることができる。
- ・限られた時間の中で活動に取り組むことを通じて、計画的に物事に取り組むことの重要性を理解することができる。

以上のねらいをふまえ、他学級、他学年との交流を行うことが適切と考えた。また、単に合唱祭当日だけの参加ではなく、練習段階からの交流を意識して行うこととした。

2 授業の実際（活動の実際）

合唱祭に向けての取組は、主に音楽の授業の中で行われた。交流の柱は二つであった。一つ目は伴奏を通常学級の生徒にお願いしたことである。休み時間等に来級し、実際に伴奏をしたり、伴奏者としての感想を伝え合ったりする取り組みをして、合唱を作り上げていった。二つ目は、3年C組との合唱交流の場を設けたことである。互いの合唱を聞き合い、感想等の交流だけではなく、パートごとに分かれて、一緒に練習をしたり、全員で合唱をしたりする活動を行った。本番では、合唱祭の場を共有したり、感想交流をしたりすることができた。また、合唱祭後の振り返りとして、3年C組の生徒と合唱し、ふじのめ学級の小学生に披露する機会を設けた。



3 授業を終えて（活動を終えて）

今回の交流の中で、生徒たちは、合唱のよさに気付く機会が多く得られた。実際に通常学級の生徒が伴奏に来てくれたことがよい刺激となり、「次回来てくれる時まで、口の大きさに気を付けてみよう」、「タイミングを合わせられるようにしよう」など、具体的な目標をもって活動に向かう姿がみられた。また、3年C組との合唱交流では、普段気付くことができない音の高さがそろう体験や、音を大きく出す工夫を得ることができた。合唱祭当日も他学級の演奏を聴きながら、自分たちとの違いを考えたり、良いところを取り入れてみたいといった声が上がったりするなど、互いによさを認め合う態度がさらに向上したと思われる。合唱祭後の振り返りでは、素敵な合唱は気持ちがよいものだと思われ、さらによりよいものを創り上げようとする姿がみられた。

資料1 交流の様子



資料2 合唱祭当日の様子



連携実践例

小学校～中学校～ふじのめ
食育

「からだ元気プロジェクト」

授業日：平成 29 年 7 月～9 月

児 童：小学校 6 年生

場 所：小・中・ふじのめ学級各教室

指導者：三田村剛 千葉史 須合幸司（栄養教諭）

1 経緯

本校は、公共交通機関を利用して札幌市全域から児童が通う学校である。また、習い事や塾に通う児童も多いため、高学年になる程、生活リズムを整えることが難しいという特徴がある。

そこで、本校児童の特徴を踏まえて、そのような状況下であっても健やかに健康を維持できるような力を育む学習を展開することとした。

2 活動の実際

本単元は、スポーツテストの結果や生活習慣の記録から児童自ら問題意識をもち、運動・食事・睡眠の点から生活の仕方を分析して、より元気になるためにこれからの自分の生活を改善していくという学習であった。

最初に、自分たちの生活に対して問題意識をもったり体力向上のための解決策を考えたり、個人で実践するところから学習を始めた。子どもたちが自ら課題を見付けて具体的に実践していく中で、特に食事の面を取り上げる場を設けた。1日の食事回数しか着目していない児童へ、内容に目を向けさせることで問題意識が生まれるようにし、「(回数も内容も)食事の点からも元気になりたい」という思いを高められるようにした。

そして、次に、基本的な食事や栄養の知識を調べたり栄養教諭から教えてもらったりしながら獲得していく場を設けた。単元の最後には、「これまでの経験を活かして全校に食の大切さを伝えたい」という思いを発信するために、みんながより元気になる給食を提案する活動を設けた。

子どもたちは献立を考える前に、他学年・中学生・ふじのめ学級にインタビューを行い、仲間が考える健康に対する思いや課題を掴んでいった。実際に、子どもたちが考えたオリジナルの給食を提供する際には、その献立の意図を伝えたり、感想を聞いたりするために各学級を回った。

3 活動を終えて

上記のような学習構成を通して、相手や目的に応じて状況を分析・検証し、よりよい生活を探究する力を子どもたちに育むことができた。

また、活動前後で体力の向上、排便習慣の改善、睡眠リズムの改善など、統計的に有意な変化がみられた。今後もこのような学習を行うことが、子どもたちの健全な発育発達に寄与すると考える。



連携実践例

ふじのめ学級

縦割り活動

「ふじのめ祭り」

授業日：平成 30 年 10 月 27 日（土）

児童・生徒：ふじのめ学級全児童・生徒

場 所：ふじのめ学級体育館

指導者：平山一馬 小田有佳里 八島奈央 山崎貴博

渡邊道人 中禰真介 山田明夏 山口翔

1 経緯

「ふじのめ祭り」は、ふじのめ学級の小学生、中学生が縦割りグループを編制して取り組んでいる、ふじのめ三大大行事の一つである。具体的な活動としては、ものづくりの活動と運動しながら、6つの縦割りグループそれぞれがアトラクションを行う出店を計画し、その運営を行ったり、他のグループの店のお客さんとして遊んだりすることに取り組んでいる。

2 授業の実際（活動の実際）

事前学習では、出店や景品の相談をするところから活動が始まる。限られた時間の中ですることを決め、PRポスターや手作りの景品（60個）の制作、出店準備を、友達やグループの担当教師らと皆で協力したり、役割を分担したりしながら行う。祭り当日は店番を行うことなどに取り組む。毎年、家族や教育実習を行った大学生、学級の卒業生たちも参加し、多くの人々が楽しみにしている行事である。



3 活動を終えて

児童生徒は、出店準備を進める過程で、自分たちだけが楽しければよいのではなく、“みんなの喜び”に目を向けてアトラクションを考えるようになっていった。実際の店作りでは異学年の仲間が関わり合いながら自然に役割が決まり、よりよい出店ができるように取り組んでいた。手作りの景品づくりにおいても、“喜んでもらえる景品”をつくろうと主体的に活動していた。

ふじのめ祭りを終え、「お客さんが楽しんでくれて、自分も楽しめた。」（活動当日の感想）という言葉からは、児童生徒一人一人にとって「“グループの一員”として祭りを成功させた達成感」や「自分たちや来てくれる人のためにという気持ちを持続して取り組んだ」ことが感じられた。

毎日の生活の中で、様々な人とともに活動する経験を重ねていくことは、「人」と関わりながら自分自身と向き合ったり、自分の力を発揮できる場所を増やしたりすることにつながると考えている。そしてこのような「仲間と作りあげた」「存分に楽しんだ」という喜びのある体験は、人との心地のよい関わり方を学ぶ場にもなっている。

<指導計画>

	時数	時間帯	主な内容	備考
事前	1	9:40～10:25	全体指導のあと、縦割りグループで 出店内容・景品の相談	体育館
	1	9:40～10:25	ポスター作り、掲示	



事前	1	9:40~10:25	出店の準備、景品作り	・活動場所は担当教師の教室
	1	9:40~10:25	出店の準備、景品作り	
	2	9:40~11:35	出店の準備、景品作り	
	2	9:40~10:35	会場準備	・体育館
		10:45~11:35	接客練習	・グループ学習の交流給食
当日	1	8:40~9:15	PRタイム練習	・体育館他
事後	1	1校時目	振り返り	・体育館他



<当日の流れ>

8:30まで	登校（制服登校）
8:40~	PRタイム練習（各縦割りグループ毎）
9:30~	開祭式
10:00~	前半開始（グループ内でお店の係と遊ぶ係に分かれます）
10:35~	後半開始（お店の係と遊ぶ係が交代します）
11:10~	閉祭式
12:00~	下校



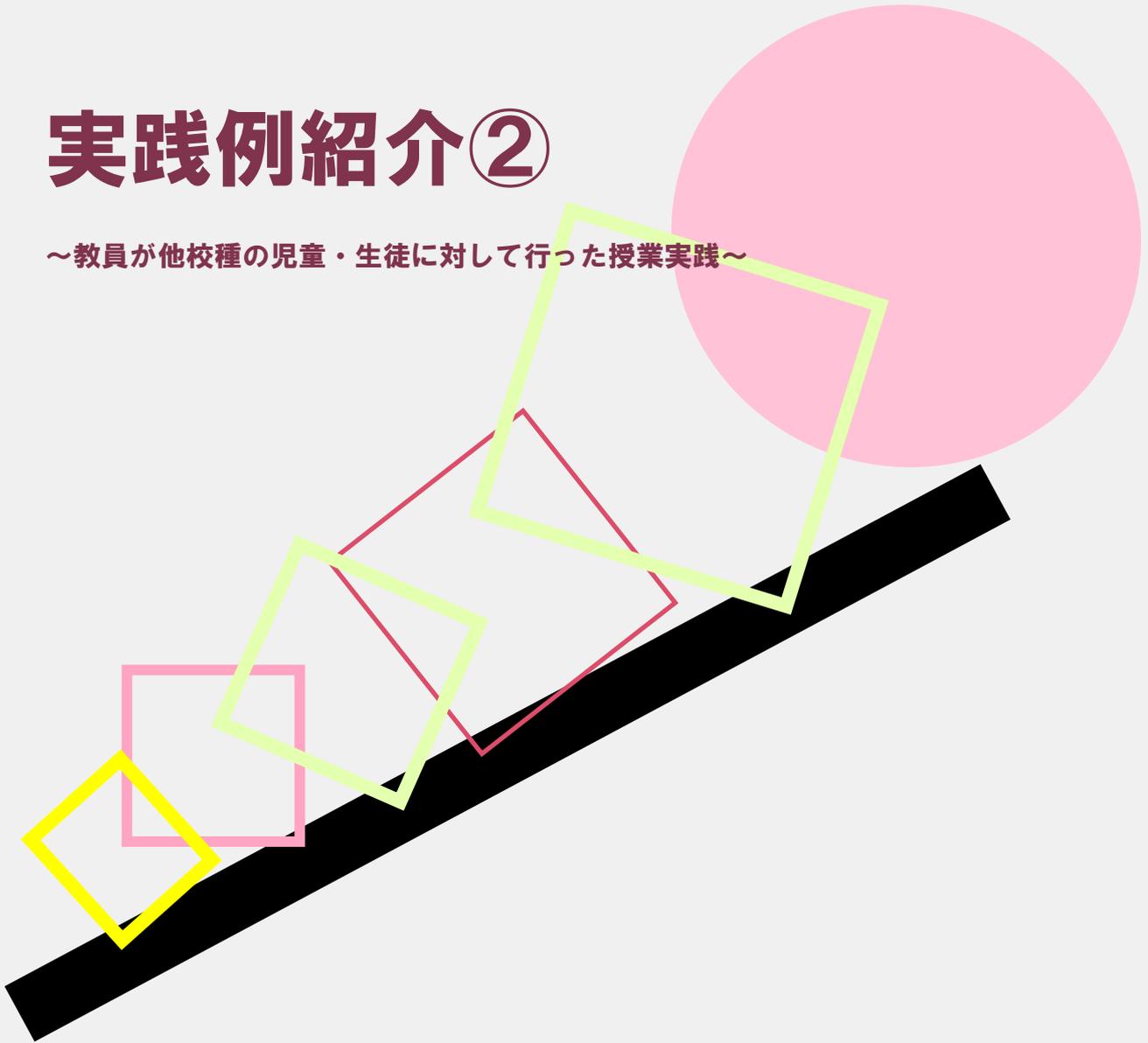
<平成30年度のグループ>

グループ名	侍魂	シンカリオン	カラフルスター	スーパーレンジャー	スマイルスペース8	ジェットウルトラスター8
リーダー	中3	中3	中3 中3	中3 中3	中3	中3
中学生	中2 中2 中1	中2 中1 中1	中2 中1	中2 中1	中2 中2 中1	中2 中1 中1
小学生	小5 小3 小2	小6 小4 小1	小6 小5 小4	小6 小4 小2	小5 小4	小6 小5 小3 小3
教員						
出店	卓球的当て	まとあてサッカー	しゃてき	さかなつり	かぼちゃさがし	かいものきょうそう
景品	おめん	バッヂ	クラッカー	手裏剣	キーホルダー	おみくじ



実践例紹介②

～教員が他校種の児童・生徒に対して行った授業実践～



P. 40-P. 41 「面積」算数科

小学校～ふじのめ

P. 42-P. 43 「LESSON 5 人の様子を伝えよう」

「LESSON 6 自分のお気に入りのものを紹介しよう」英語科

小学校～中学校

P. 44-P. 45 「からだのなかをのぞいてみよう」保健体育科

小学校～ふじのめ

連携実践例

小学校～ふじのめ
算数

「面積」

授業日：平成 29 年 6 月 6 日

児童：ふじのめ学級 5・6 年生

場所：ふじのめ学級教室

指導者：瀧ヶ平悠史

1 経緯

本実践は、小・中・ふじのめ連携プロジェクトにおける取組の一環として行われたものである。小学校教員による授業を通して、ふじのめ学級児童の資質・能力の育成並びに、教員の授業力向上、小・中・ふじのめ学級における連携の方向性を検討していく上での提案として位置付けられたものである。

2 授業の実際（活動の実際）

本実践では、「くじ」による教材化ということから、どの児童も意欲的にゲームを楽しみながら学習に取り組んでいった。本時導入では、いくつかの「図形」を順に一つずつ提示していき、それが「当たり」か「はずれ」かを判断していくという流れで学習が展開していく。子どもたちは、一つ目、二つ目と図形が提示される度に、「これは当たりのような気がする。だって・・・」「辺の本数が当たりに関係しているんじゃないかな」と、自分なりの考えを積極的に伝え合っていた。また、後半になるに従って、「当たりの形は全部に□が 4 個ずつ入っているよ。」「この形は□が 5 個だから、きっとはずれじゃないかな。」「当たりは□が 4 個でできている形だ！」と、数学的な見方・考え方を働かせて考える姿がみられた。

授業の最後には、同じように□が 4 個の図形であっても、その□の大きさが異なる場合の（単位となる□の面積が違う）図形を提示した。これによって、同じ大きさ（広さ、面積）の□が 4 個でなくては当たりにならないという、「単位面積」に着目する見方を引き出すことをねらったのである。

子どもたちは「□の大きさが違うことは当たりに関係しているか関係していないのか」について話し合いを深めていった。その後、この図形が「はずれ」であることを全体で確認すると、「□が 4 個だけでなく、大きさも同じものでできていなければならない」ということをどの子も理解していくことができた。

3 授業を終えて（活動を終えて）

子どもたちは大変積極的で、どの子も意欲的に学んでいる姿が印象的だった。また、自らの見方を友達に伝えようとする過程で、たくさんの考えを表現する姿もみられた。

ただ、本時では、上記のように「同じ大きさの□が 4 個の場合が当たり」だということを発見し、理解したところで授業を終えている。時間があれば、実際に一人ずつに紙でできた□を 4 個渡し、「□4 個でできる形づくり」に取り組ませたいと考えていた。

本時の中では扱えなかったが、ふじのめ学級の担任に教材を渡し、後日取り組んでもらっている。

このような自分の手を使って取り組む体験的に学ぶ活動は、頭で理解したことを定着させていく上でとても大切な活動だと考える。こうしたことに、小学校、ふじのめ両担任が連携して取り組めたことは、とても意義のあることであった。



○算数科学習指導案 「面積」(トピック的扱い)

学 級 ふじのめ学級 指導者 瀧ヶ平悠史

<本時で育みたいもの> ○共通するものを見ようとする態度。
 ○共通点から帰納的にきまりを見いだし、それをもとに類推して考える見方・考え方。
 ○単位面積のいくつ分で図形の広さを捉える見方。

子どもの活動・意識	教師のかかわり
<div style="text-align: center; margin-bottom: 10px;">くじをしよう！</div> <p>当たりは、辺が10本の場合かな。</p> <p>ポコッと1つだけ飛び出したのが当たりかも。</p> <p>当たりはまだあるのかな・・・。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin: 10px 0;">何が当たりなのかな？</div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">当たり</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">当たり</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">当たり</div> </div> <p>当たりは共通しているのは・・・。</p> <p>わかった！！線を引くとわかりやすい！！</p> <p>どれも、4個だ！！</p> <p>4個って、何が4個？</p> <p>当たりは全部、正方形が4個なんだ！！</p> <p>どの当たりにも共通しているね！</p> <p>○もう1個くじがありました。これは当たりかな？はずれかな？</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">同じく線を引けばわかるね！！</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">正方形4個分だから、当たりだよ！</div> </div> <p>え？何ではずれなの？</p> <p>この広さの正方形の4個分じゃなきゃだめなんだ！</p> <p>正方形の大きさが違うんだ！</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin-top: 10px;"> はずれ </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin-top: 10px;"> 当たりには、同じ広さの正方形4個分の形だったんだ！ </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・図形を順に1枚ずつ黒板に貼っていく。(裏返すと「当たり」か「はずれ」が書いてある。) ・図形を貼る度に、「これは当たりかはずれか」を問い、当たりに対する見方を引き出していく。 ・いくつか当たりが出た段階で、何が「当たり」なのかを一人一人で考える時間を取る。 ・引き出した見方を位置付けていく。 ・全てに共通するのが「正方形が4個」であることを明確にする。 ・新たにくじを1つ提示し、当たりかはずれかを考えさせる。 ・正方形は正方形でも「ある特定の同じ広さの正方形が4個分」であることを明らかにする。

連携実践例
小学校～中学校
英語科

「LESSON 5 人の様子を伝えよう」

「LESSON 6 自分のお気に入りのものを紹介しよう」

授業日：平成 28 年 1 月 19 日～3 月 23 日

児 童：小学校 5 年生

場 所：小学校各教室

指導者：山口修司

1 経緯

北海道教育大学 4 キャンパス、8 附属学校が連携し、平成 24 年度から 3 か年計画で、国際社会において主体的に活躍できる英語のコミュニケーション能力を育成するため、小学校に新教科を新設し、中学校には新領域を導入することで、4 技能を総合的に育成するカリキュラムや指導方法及び評価方法、中学校との円滑な接続の在り方についての研究開発を行った。

「小学校英語教育の指導力向上プロジェクト」を母体としている本プロジェクトでは、小学校英語と中学校英語を有機的に関連させて、小中一貫の実践的カリキュラムを構築することを目指し、附属小学校でのこれまでの先進的実践研究の成果を生かしながら小学校英語のカリキュラム開発に取り組んだ。

その小中一貫のカリキュラム開発における手立ての一つとして、小学校第 5 学年の英語科の授業計 10 時間を、中学校の英語科教員が行うこととなった。

2 授業の実際（活動の実際）

(1) 単元：LESSON 5 「人の様子を伝えよう」（4 時間）

LESSON 6 「自分のお気に入りのものを紹介しよう」（4 時間）

※授業内容は北海道教育大学による研究開発、小学校英語プロジェクトが作成した学習指導案に準ずる。（次頁に学習指導案の一部を記載）

(2) 単元の主な流れ

ビデオや教師の例を見せながら導入し、初見の人物の見た目などについて表現練習を行い、芸能人やスポーツ選手の内面も含めた表現練習に発展し、最後は自分の好きな人物やキャラクターの紹介をまとめの活動とした。

(3) 指導重点事項

人の外見・内面を表す簡単な形容詞を学習し、自分の考えを述べるところと、そこから聴衆（仲間）に意見を求めるやりとりを重点に指導を行った。

《人の様子を表す形容詞》

- 外見：cute, beautiful, handsome, scary, strong
- 内面：cool, funny, interesting, great, smart

《コミュニケーション活動のための表現》

- 見せる：Look at this.
- 紹介・説明：This is/It's-,
He is/She is-,
- 自分の考え：I think -.
- 相手の考えを尋ねる：What do you think?
- 質問に答える：I think so too.

3 授業を終えて

児童は、それまでの小学校外国語活動等の学習経験から、思った以上に多くの形容詞を知っていた。そのため、人の様子を表す形容詞については再度それらを振り返りながら既習語の定着を図り、そこから新たに数語を加える程度が適切であったと感じる。授業づくりにおいて、児童・生徒の実態把握は当然重要であるが、校種間の教員同士による事前の情報共有や共通理解が欠かせないことを実感した。

また、中学校段階での学習内容・活動とのつながりや、中学校卒業時の到達目標を想定しながら指導することが、小中の英語学習の円滑な接続や効果的な一貫カリキュラム構築の第一歩であり、その点で、中学校の教員が小学校で授業を行うことには大いに価値があると感じた。

中学校の授業に加えて、小学校の授業準備、小中教員間の打合せ等、時間的・物理的に苦勞も多いが、その分、意義深い実践といえる。中学校英語科教員による近隣小学校への、いわゆる出前授業はよく行われているが、共通・一貫した学習内容・活動等を意識した年間計画や学習指導案等をもとに、意図的・計画的に実践することで、より大きな効果を生むと考える。

資料

5年 Lesson 5 人の様子を伝えよう (1/4)			
単元の目標	人の性格や様子を伝え合う活動を通して、性格や様子を表す言葉の違いに気付き、性格や様子を表す言い方、それに同意したり、反対したりする表現の技能を身に付け、自分の考えを積極的に伝え合おうとする。		
本時の目標		本時で扱う主な語彙・表現	
人の性格や様子を表す言い方を聞いて、特に形容詞の部分を書いてみる。		What do you think? He's so great. great, smart, interesting, cool funny, pretty	
準備	デジタル教材、人物の写真(教材を一人ずつA4で数枚印刷)、6枚綴りの写真		
学習過程	活動内容 (○)	留意点 (○) 教師の支援 (☆)	評価のポイント (◇)
Warm up 10分	○T: Hi, class! C: Hi, ~先生! T: How's it going? C: Good, (thank you.) and you? T: Pretty well, thank you. ○What day of the week is it today? ○What's the date today? ○音と文字		
導入 10分	○MOVIE ダイアログを見て人に対する感想をどのように表現するかを学ぶ。 表現を繰り返して練習する。		
活動 10分	○PWPで練習 ①教師は写真を一枚ずつ出して Look at this picture. What do you think? と子ども全体に聞いていく。 ②子どもは He's funny. She's pretty.等と一人ずつ感想を言う。	○写真を用意 ☆最初は教師が表現を言うのを助ける ○最初は全体に質問するが、次に一人ずつ聞いていく。1枚につき5, 6人に、質問する。	
活動 12分	○どう思う? ① (6枚綴りの写真) グループで活動を行う。 一人一枚写真を選び、友達に Look at this picture. What do you think? と聞いていく。自分が選んだ写真でどの感想が多かったかを発表する。 *活動ごとに写真の種類を変える	○英語的には自分の意見を最初に言うのが正しいが、ここでは段階的に練習する。	◇積極的に質問したり答えたりしている。
振り返り 3分	○振り返り ○終業のあいさつ H: That's all for today. C: Thank you, ~先生. Thank you, ~先生. H(A): You're welcome. Have a nice day.		

連携実践例

小学校～ふじのめ

保健体育科

「からだのなかをのぞいてみよう」

授業日：平成 29 年 12 月 8 日

児 童：ふじのめ学級 4～6 年生

場 所：ふじのめ学級教室

指導者：田口芳佳 平山一馬

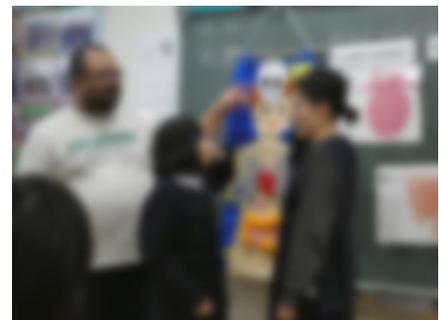
1 経緯

これまで、ふじのめ学級小学校では、保健指導の内容にかかわっては、児童の学齢及び発達段階等を考慮し、主に日常生活の指導の中で取り上げてきた。また、指導内容によって必要がある場合は、個別に担任が指導することもあった。今回、在籍している児童の集団としての実態を考慮し、保健指導についてより一層の充実を図るため、養護教諭と連携して授業作りを進めることとなった。本実践は、ふじのめ学級の児童 4～6 年生を対象に行ったものである。

2 授業の実際

授業冒頭では、身体の外側や血液といった目に見える部分を題材として取り上げたクイズを行った。指紋のクイズでは、実際に自分の指にインクを付けて紙に押し当て、友達の指紋との形の違いをじっくり見比べたり、それぞれのクイズの答えと説明に興味をもって聞こうとしたりする姿がみられた。また、身体の中にある臓器について考える場面では、児童の何名かは、各臓器の名称や大体の位置についてなど、これまでの生活で見聞きした情報から知っていることについて積極的に発表していた。しかし、名称や位置について知っていても、それらの臓器の働きや、どのくらいの大きさなのかといったことなどについてまでは知らない児童が多く、聴診器を当てて心臓の鼓動を注意深く聴こうとしたり、腸の長さをリボンで表した際には、その長さに驚いたりする様子が見られた。

授業を終えた児童からは、新たに知ったこと、自分の予想とは違ったこと、身体にかかわって他に知っていることなどを、友達と話したり教師に伝えたりする姿がみられた。

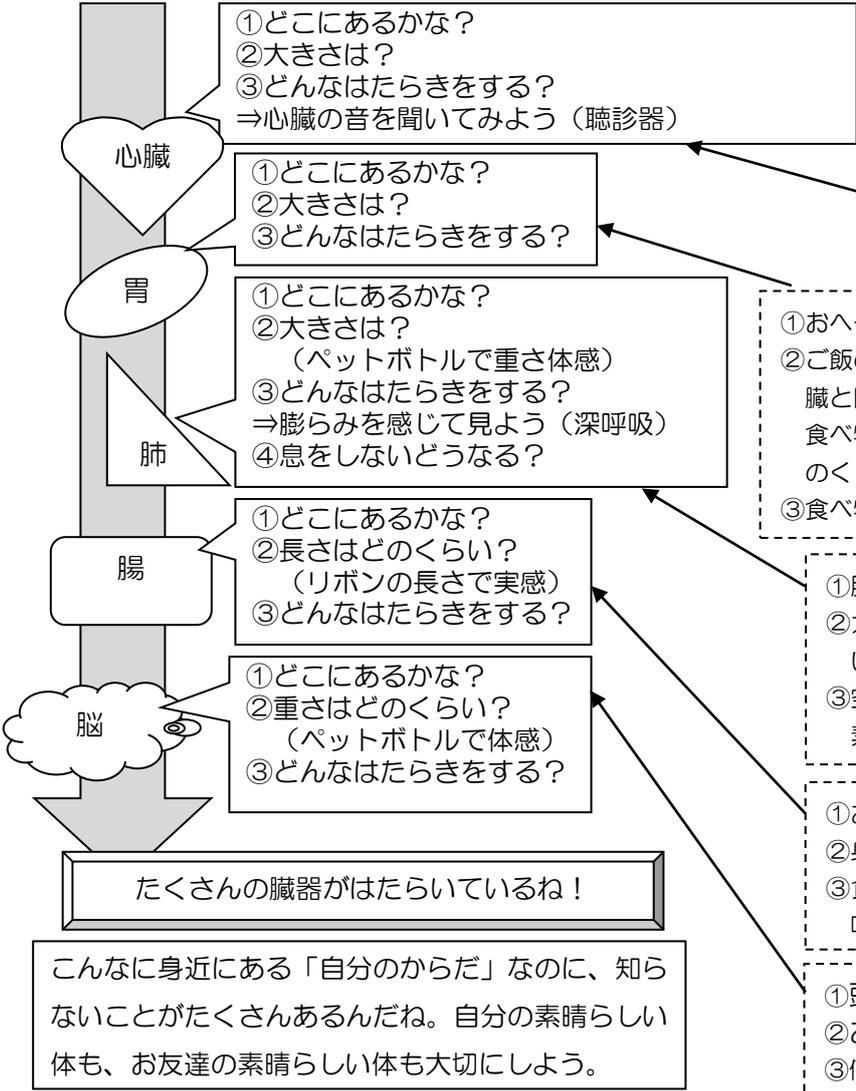


3 授業を終えて

本実践は、身体のこと（各器官、臓器の働きや成長による変化など）を知り、自分や仲間を大切にしようとする気持ちを育むことを目的とした題材の一時間目の授業として行われた。今回の授業を通して、自分たちの身体のことを知るだけでなく、身体という対象への意識を一人一人高めることができたものとする。本時の後に行った学習（身の回りの清潔、男女の同じところ・違うところ、自分や友達を大切にするためにできること）の中でも、新たなことを知ろうと、積極的に体験的な活動に参加しようとしていたり、自分や友達の知っていることや考えたことなどを基に新たなことに気付いたりする姿がみられていた。

資料1 本時指導案

- ねらい (1) 臓器の存在を知り、自分の持っているパワーを知る。〈体の発育・発達〉
 (2) 自分を大切にしようとする気持ちを育てる。〈心理的な発達〉
 (3) 自分も友達もかけがえのない存在であることを知る。〈人間関係〉

主な学習内容	備考
<p>★ ○×クイズ『からだのはたらき』</p> <p>・爪 ・指紋 ・血 ・耳 ・髪 など⇒別紙</p>	<p>・クイズのパネルを見せながら話す。</p>
<p style="text-align: center;">体の中はどうなっているんだろう？</p> <p>体博士の田口先生が、詳しくお話をします。</p>  <p>①どこにあるかな？ ②大きさは？ ③どんなはたらきをする？ ⇒心臓の音を聞いてみよう（聴診器）</p> <p>①どこにあるかな？ ②大きさは？ ③どんなはたらきをする？</p> <p>①どこにあるかな？ ②大きさは？ （ペットボトルで重さ体感） ③どんなはたらきをする？ ⇒膨らみを感じて見よう（深呼吸） ④息をしないどうなる？</p> <p>①どこにあるかな？ ②長さはどのくらい？ （リボンの長さで実感） ③どんなはたらきをする？</p> <p>①どこにあるかな？ ②重さはどのくらい？ （ペットボトルで体感） ③どんなはたらきをする？</p> <p>たくさん臓器がはたらいているね！</p> <p>こんなに身近にある「自分のからだ」なのに、知らないことがたくさんあるんだね。自分の素晴らしい体も、お友達の素晴らしい体も大切にしよう。</p> <p>★質問タイム</p>	<p>・じんたい模型を活用しながら臓器の見た目、場所、大きさ、働きを一緒に考える。</p> <p>・説明した臓器のある場所を触ってみる。</p> <p>各臓器の特徴</p> <p>①胸の中心から少し左側。 ②自分の握りこぶしぐらい。 ③体全体に血を送り出す。</p> <p>①おへその上あたり。 ②ご飯の食べる前のお腹がすいている時は、心臓と同じぐらいの自分の握りこぶしぐらい。食べ物を食べると、風船のように伸びる。どのくらいまで大きくなるかは、人それぞれ。 ③食べ物を胃液という液で溶かし、消化する。</p> <p>①胸に右と左、一つずつある。 ②大きさは、人体模型のものと同じぐらい。空気を吸うと大きくなる。 ③空気を吸って、肺の中で酸素と二酸化炭素を交換する。</p> <p>①おへその下あたり。 ②身長の高さの4倍。 ③食べ物の中に入っている栄養や水分を吸収する。ウンチを溜めておく。</p> <p>①頭蓋骨という頭の骨の中にある。 ②およそ1400g。 ③何かを考えたり、痛い、暑い寒いなどを感じたり、嬉しい悲しい怒るなどの感情を感じたりするところ。</p>

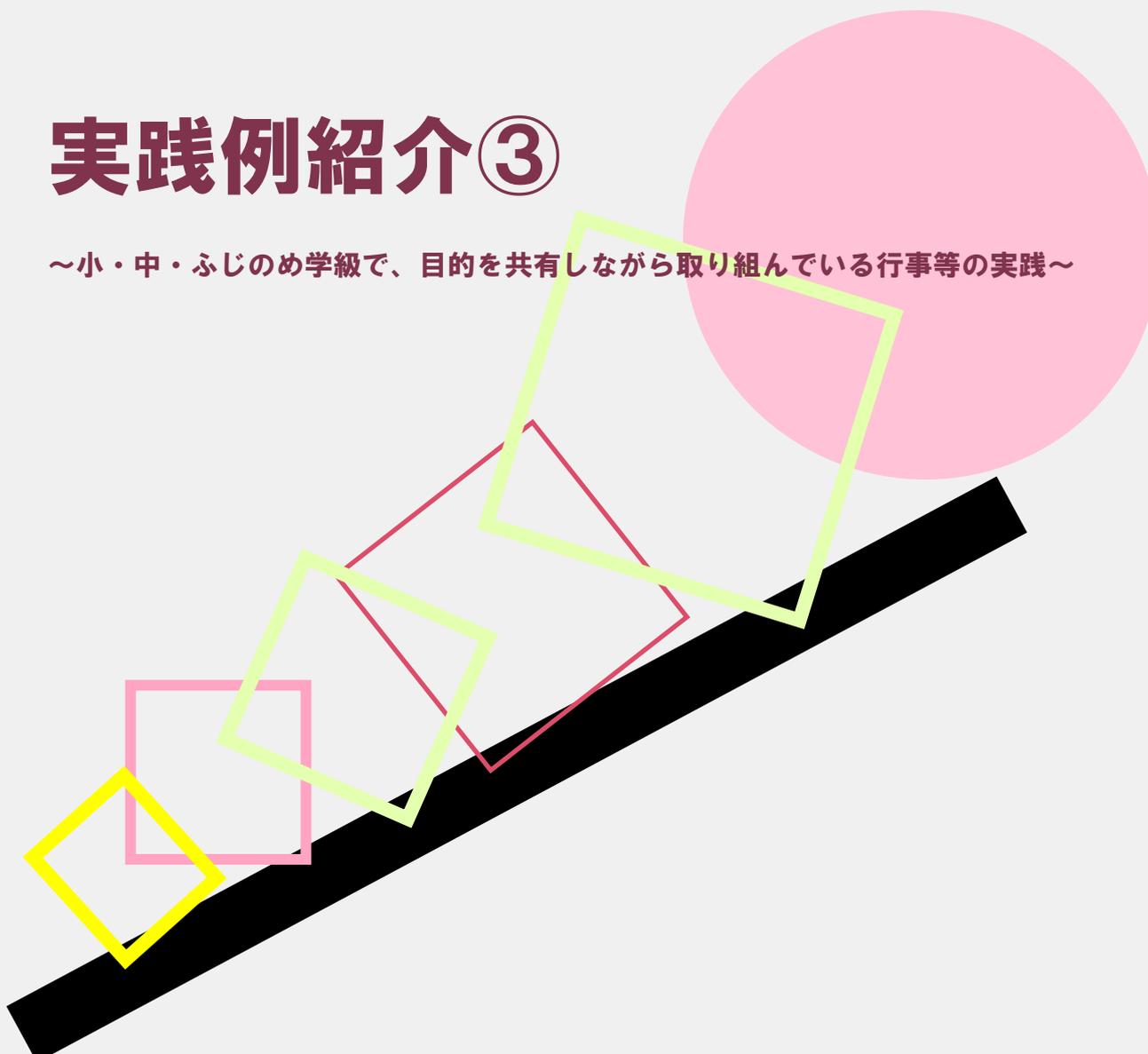
資料2 教材

- ・人体模型（私のからだ教材）
- ・聴診器（心音を聞く）
- ・ペットボトル（肺、能などの重さを体感）
- ・リボン（腸の長さを再現）



実践例紹介③

～小・中・ふじのめ学級で、目的を共有しながら取り組んでいる行事等の実践～



P. 48-P. 49 「合同体位測定」

小・中・ふじのめ

P. 50-P. 51 「合同避難訓練」学級活動

小・中・ふじのめ

P. 52-P. 53 「防災引き取り訓練」学級活動

ふじのめ（小）

連携実践例
小・**中**・ふじのめ
合同体位測定

「 合同体位測定 」

授業日：平成 30 年 4 月 24 日（火）
児童・生徒：附属学校全児童・生徒
場 所：小・中体育館、実習生室
指導者：岡山知子 折田侑以

1 経緯

本校では、小学校、中学校、ふじのめ学級の校舎が渡り廊下でつながっているため、検査会場間を移動しやすいことから同じ日に時間差で体位測定、視力検査、聴力検査を行っている。中学校保健委員会の生徒が、小学生の誘導・補助を担当することで、小学校養護教諭が聴力検査会場を担当、中学校養護教諭が体位測定、視力検査会場を担当することができ、全体の指導を円滑にできるという利点がある。校種毎に以下のめあてを設定している。

- ・小学校：自己の成長の様子を知ることやバランスをみることで、今までの生活を振り返り、自分の身体を大切にしようとする態度を養う。
- ・中学校：自己の成長の様子を知ることやバランスをみることで、今までの生活を振り返り、健康増進の自覚を高める。また、正しい測定法や受け方を理解し、能動的に体位測定ができるよう協力する姿勢を身に付ける。

また、北海道教育大学養護専攻の学生 26 名を対象に、入学後すぐの時期に基礎実習として前日のうちに小学校・中学校の養護教諭より合同体位測定の事前指導を行っている。当日は児童生徒の測定を実際に経験し、通知作成等の事後措置まで行うことで、養護教諭をめざす学生の意識、意欲を更に高める場としても活用されている。

2 授業の実際（活動の実際）

以前は午前中、半日日程での体位測定を実施していたが、会場、誘導方法の工夫をし、昨年度より朝～2校時までの時間帯で実施するようになった。前日までに会場設営、事前指導を行い、児童・生徒は、当日の朝登校後、順次着替え場所でジャージに着替え、スムーズに移動、測定できるようにしている。測定会場間の誘導は中学校保健委員が行い、各学級でのタイムスケジュールの説明、測定の補助も分担した。



特に小学校低学年を担当した保健委員は丁寧に分かりやすい説明を心がけ、待ち時間には静かにしてもらおうための工夫を考えてくるなど、能動的に体位測定ができるように協力する姿勢が多くみられた。

3 授業を終えて（活動を終えて）

全校児童生徒が一斉に測定を行うため、タイムスケジュールを、小学生・中学生がお互いの姿を見合えるように組むようにした。中学生として正しい測定法や受け方を理解し、能動的に体位測定ができる様子を小学生に見てもらい、お互いに成長する場としても機能していたと考える。また、聴力検査会場での検査で予定がずれ込んだ際、保健委員の情報伝達により、養護教諭が各々の検査会場を離れることなく測定順を入れ替えるなどの対応がスムーズにでき、定時に測定を終了できたことは運営面での利点と言えるだろう。

資料1 当日のタイムスケジュール

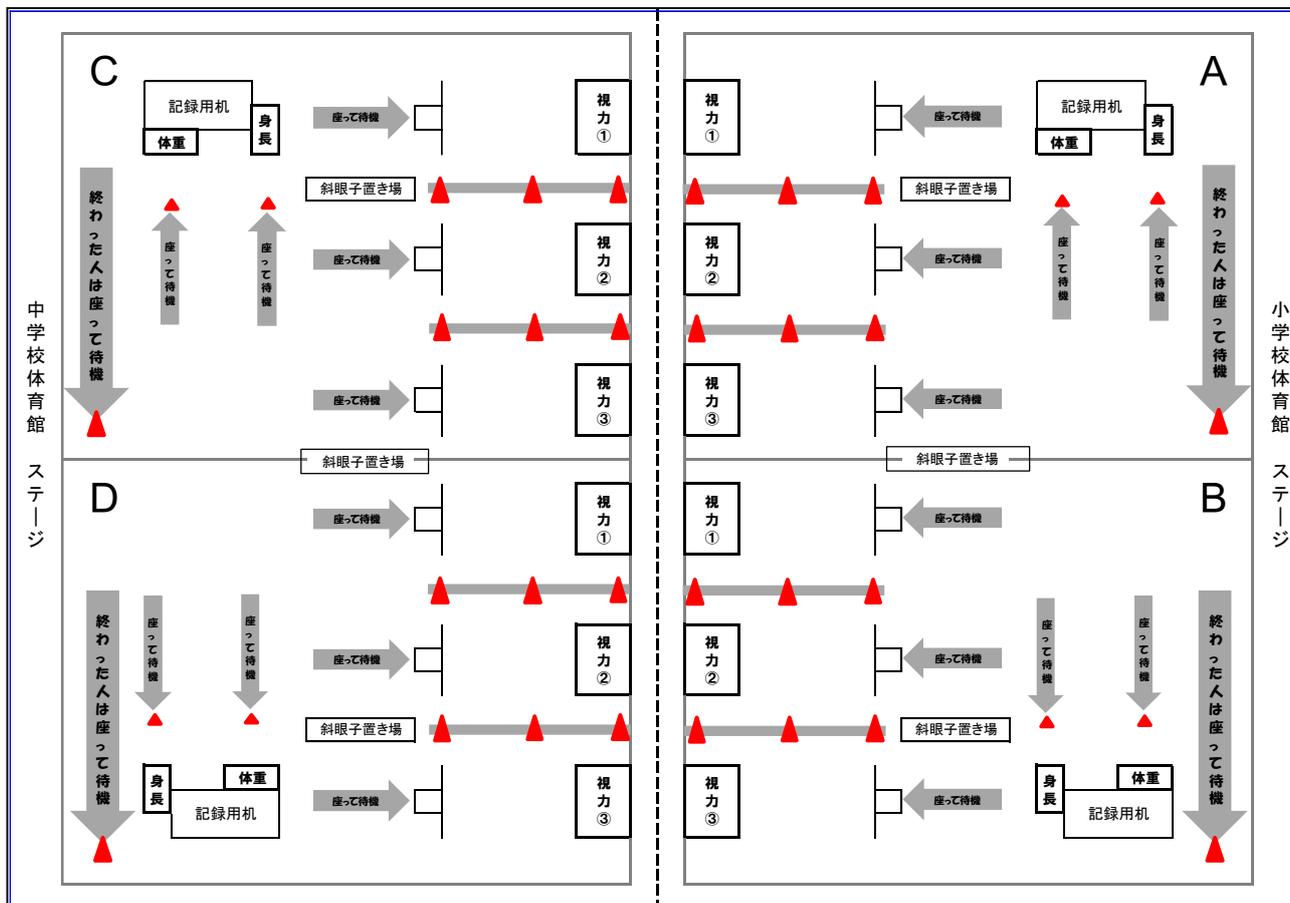
体位測定	小学校体育館		中学校体育館	
	A	B	C	D
8:55	中3 女子		中3 男子	
9:15	6年男子	6年女子	3-1	2-1
9:30	中1 女子		中1 男子	
9:50	4-1	1-1	3-2	2-2
10:05	4-2	1-2	5年男子	5年女子
10:20	中2 女子		中2 男子	
10:40	ふじのめ		ふじのめ	

※保健委員は、各予定時間の10分前には教室に到着し、持ち物、検査の順、受け方を指導し会場へ誘導する。

聴力	中学校 実習生室
	4か所
8:55	2-1
9:10	4-1
9:25	1-1
9:40	1-2
9:55	4-2
10:10	2-2
10:25	中1 A
10:35	中1 B
10:45	中1 C
10:55	ふじのめ

資料2 会場図

体位測定・視力検査会場（小・中体育館）



連携実践例

小・**中**・ふじのめ
学級活動

「小学校・中学校・ふじのめ学級 合同避難訓練」

授業日：平成30年6月12日、平成30年10月16日

児童・生徒：附属学校全児童・生徒

場 所：バス駐車場

指導者：各校避難訓練担当者

1 経緯

各校で実態に応じ避難訓練に取り組んでいるが、そのうち年2回は、小学校・中学校・ふじのめ学級の児童・生徒がすべて参加し、合同で避難訓練に取り組んでいる。そのねらいは、同じキャンパスに通う仲間と合同で避難する活動を通して、安全な避難の仕方や、防災について関心を持ち、互いの安全を確保することを意識しながら、避難訓練に真剣に参加する態度を身に付けることである。避難訓練の目的として、「火災対応」「地震対応」「不審者対応」のサイクルで回しているが、今年度については、2度とも「地震対応」とした。6月については、当初の予定通りであったが、10月については、北海道胆振東部地震を受け、各校種担当者間で話し合い、再確認をする意味で地震への対応とした。

2 授業の実際

(1) 事前の担当者会議

合同避難訓練の実施にあたっては、事前に各校種担当者が集まって会議を開き、ねらいや実施要領を整理するところから始める。異校種また異学年の児童・生徒全員が一つの取組を行うことになるので、各々の状況や特性を共有しなければ、意義あるものとはならず、場合によっては安全を損なうことさえも想定される。顔を合わせて質疑を重ね、互いに意見を出し合いながら、避難マニュアルを改善し、実施に向けての準備を進めている。

(2) 6月の避難訓練

避難訓練実施の直前、各教室にて学級担任より学級全体への指導が行われた。避難目的によって対処方法や避難方法が異なることの確認に加え、今回のねらいや避難方法を把握した。その際、小学校・中学校・ふじのめ学級共通の合言葉として定着している「お・は・し・も」(おさない・はしらない・しゃべらない・もどらない)についても、再度確認した。なお、中学校では、訓練の前日に学級代表と学級議長に対し、避難時における整列及び点呼の方法に関する一斉指導を行っている。

実際の訓練では、中学校から一斉放送を流し、地震の状況を確認した後、避難指示の放送に従い、全児童・生徒が速やかな移動を行うことができた。全体講話の後、各教室にてワークシートをもとにした振り返りを行った。右のワークシートからも合同で取り組むことの意義がうかがえる。

今回の避難訓練を振り返り、避難の在り方や訓練に臨む姿勢、訓練の意義等を踏まえ、個人、および、学級や学年などの集団はどうでしたか。

小中ふじのめ合同ということもあって、集まったときにとても人数が多かったです。そのときに、必ずり合うことができていたので、これからも続けていきたいです。

【中学1年生の振り返りシート】

(3) 10月の避難訓練

2回目の実施にあたっては、9月に発生した北海道胆振東部地震を踏まえ、各校種担当者間で改めて

マニュアルや実施要領を丁寧に見直した上で、「地震対応」を目的とした訓練を行うこととした。まず、防災教育を専門としている中学校長（本学札幌校教授）に助言を賜り、避難時の合言葉「お・は・し・も」に加え、地震対応時の合言葉として、「お・う・た」（落ちてこないか・動いていないか・倒れてこないか）を小学校・中学校・ふじのめ学級で共通確認することとした。地震対応時に配慮しなければならないことを、小学校やふじのめ学級の児童にも分かりやすく、そして理解しやすい言葉で表現した。

当日は、震災直後ということもあり、児童・生徒が互いの存在を配慮しながら、安全かつ迅速に避難することができるよう、これまで以上に高い意識で取り組む様子がみられた。「お・は・し・も」「お・う・た」の定着や、時期や天候などを想定するといった視点の広がりも、成果としてみられた。また、教員にとっても各校種間の連絡方法の詳細等を再確認することができ、意義深い訓練となった。

3 授業を終えて

合同避難訓練を終え、避難自体に対する大切さを実感することはもちろんであるが、同じキャンパスに通う小学校・中学校・ふじのめ学級のすべての児童・生徒、教職員が一堂に会し、互いの存在を確かめ合う場としても重要であると感じる。棟続きの校舎であるが、全員が一斉に集まる機会は多くはないことから、「顔が見える関係」を築く絶好の機会となる。災害時においては、日々の備えを含めた「自助」「共助」「公助」が不可欠である。特に学校においては、「共助」が深く関わる。いざとなってから初めて動くのではなく、日常的につながりをもつことで、もしもの場合につなげていきたい。

今から5年ほど前になるが、「不審者対応」の合同避難訓練において、「小中連携」で取り組むことを意識し、避難時において中学生（上級生）が小学生（下級生）をリードして避難することができるようなシステムを構築することをねらいとした取組を試みた。体育館にて、異校種、異学年の児童・生徒が小グループで交流活動をする中、災害（事件）が起こり、中学生（上級生）が中心となって避難するといったものである。



事前の取組として、学級代表や学級議長が、合同避難訓練のねらいや避難方法について寸劇で説明し、それを受けて、中学生が小学生に対し、どのような交流活動を行うべきか、また、避難の仕方を行うべきかを検討し、役割分担を行った。当日は、普段、共に活動することがほとんどない児童・生徒が入り交じり、防災に関する対話を行ったり、避難を共に行ったりすることで、関係がより密になる様子が見られた。特に小学生からは、お兄ちゃん・お姉ちゃんと仲良くなれて楽しかったという声が多数聞かれた。教師からも、小中連携をこれまでとは異なる視点で捉え、実践することができよかったという感想が挙がった。しかし、防犯対応の避難訓練という観点では不十分なものであり、校種によって教育課程が異なることもあって、事前の準備が大変であったのも事実である。ただ、「児童・生徒のつながり」を築くには、大変有意義な取組であったので、今後も、連携の一つの方法として実践を模索していきたいと考える。

連携実践例
ふじのめ
防災指導

「 防災引き取り訓練 」

授業日：平成 29 年 9 月 25 日（月）
児 童：ふじのめ学級全児童
場 所：ふじのめ学級体育館、各交流学級教室
指導者：山崎貴博 八島奈央
平山一馬 小田有佳里 各交流学級担任

1 経緯

本学級では大規模災害発生時の避難状況を想定し、平成 25 年度より防災引き取り訓練を実施している（平成 25 年度と平成 27 年度は防災宿泊引き取り訓練）。この訓練では、教員側と児童側それぞれにおいて、次に示すねらいを設定している。

- ・災害が発生し、保護者との連絡が不通、避難経路が寸断され本校が孤立した状況を想定した訓練を行うことによって、緊急時においても、児童の安全を確保するための方策を見いだす。
(教職員側のねらい)
- ・緊急時を想定した訓練を行うことで、児童一人一人が実践を通して学び、確かな危機回避能力を身に付ける。(児童側のねらい)

昨年度までの経緯も踏まえ、平成 29 年度の防災引き取り訓練では、交流学級児童と一緒に避難訓練を行った後、ふじのめ学級体育館において、災害時を想定した状況下での引き取り訓練を行うこととした。

2 活動の実際

防災引き取り訓練に関わる授業は、通常授業が終わった後から行われた。当日は荒天のため、当初予定していた大地震を想定した避難訓練（大学展望台に避難）は中止となった。全校児童が体育館に集まり「防災の心構え」についての話を聞いた後、ふじのめ学級校舎で災害時を想定した活動に取り組んだ。具体的には、ふじのめ学級体育館を避難場所として校舎内の電気が使えなくなった状況を設定し、その中で保護者の迎えが来るまで友達と一緒に静かに過ごしたり、その場での教師の指示を聞いて必要な準備を行ったりすることに取り組んだ。



3 活動を終えて

今回の訓練では、電気が使えないという「非日常的な状況」を設定するとともに、事前にどのような取組をするのかを児童たちに伝えないようにした。普段とは違う状況、見通しのもちにくい状況をあえて設定することで、「実際に災害が起きたらどうしたらよいか？」という思いをもって、真剣にその場での教師の指示を聞こうとしたり、自分で気持ちを落ち着けて行動しようとしたりする姿が多くみられた。また、訓練を進める中では、友達同士で協力して頑張ろうとしたり、励ましあったりする様子もみられた。日常生活の中では、先の見通しがもちにくいことで不安をもつ児童もいるが、一人一人が普段の避難訓練から、本番をしっかりと想定するとともに、「自分たちの命を守る大切な勉強」と捉えていることから、最後まで気持ちを落ち着けて参加することができたと考える。

資料1 当日時程

時間	主な流れ
	※当日は全学年6時間授業とし、6校時まで通常授業を行います。
15:00頃	○大地震発生（訓練） ○一度目の保護者への緊急連絡～下校不可のため、学校待機のメール送信
15:15～15:40	○防災訓練の心構え
15:40～16:30	○大津波を想定した避難訓練～大学展望台 ○16:30頃保護者への緊急連絡～引き取り訓練実施メール
16:30	○全校児童体育館へ避難（荷物をすべて持って移動）
16:30～17:00	○体育館で災害時の過ごし方についてのお話。 飲料水を1人1本支給。
17:00頃～	○保護者への引渡し開始 来校した順に引き渡し。正面玄関から入り、廊下を左側通行で体育館までの通路を通る。保護者は体育館の学年ごとのブースに直接行き、児童の引き渡しを行う。帰りも正面玄関より下校。
	○引渡し終了予定 保護者が迎えにくるまで、児童は読書をしたり、休憩をとったりするなどして過ごします。（災害時のため落ち着いて過ごす）

資料2 大津波発生時の避難経路



あとがき

北海道教育大学附属札幌中学校校長
佐々木 貴子

本実践誌をご覧頂きまして、ありがとうございました。

私どもは、北海道教育大学の第3期中期目標として、北海道の公立学校教員の授業力向上に寄与することを目指し、平成28年度から旭川・釧路・函館・札幌の4地域の附属学校園において、各地区の特色を活かした小中一貫教育推進事業に取り組んでおります。札幌地区では「グローバルな視点を基にした小・中・ふじのめの連携教育」をテーマとした実践を継続的に行って参りました。ただ、第3期中期目標には、札幌地区では「グローバルマインド」育成の小中一貫をめざす教育課程を発信すると記述されています。この冊子を手にした方の中には、タイトルをみて言葉の違いにお気づきになった方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

そこで今回、本実践誌を作成するに際し、「グローバルマインド」という言葉の定義や用いられた理由等について見直すことに致しました。「グローバルマインド」という言葉は、平成22(2010)年度から3年間で取り組んだ附属札幌中学校の研究紀要に定義されており、そこには「持続可能な社会の構築をめざし、より広い視野、多様なものの見方や考え方に立って、自ら思考・判断し、行動しようとする意識」と記述されていました。第3期中期目標が「北海道教育大学附属学校園の今後の在り方に関する有識者会議報告書」(平成25年3月)の提言に基づいて方針が示されていることから、どうもこの報告書に札幌地区の取り組みとして記載されていた「グローバルマインド」という文言がそのまま使われたのではないかと考えられます。しかし、「グローバルマインド」は和製英語であり、また私たちは子どもたちの「意識」を育てることを目標にしているわけではなく、あくまでも、「グローバルな視野をもち、多様な社会の人々と共に生きるための態度や技能を身に付け、持続可能な社会づくりの担い手となる生徒を育成」することを目指していることから、研究の枠組みを再構築することに致しました。

さて、皆様はこの実践誌を読まれて、どのような感想をお持ちになったのでしょうか。ここに挙げられている実践例と同じような実践を、既にされている先生方もいらっしゃるのではないのでしょうか。また、この実践例を基に、授業の構想が広がった先生、さらにはもっとよい実践につなげるためにはこのような教材を使った方がよいと教材のイメージを膨らませた先生方もいらっしゃるのではないのでしょうか。ここに挙げた実践は、あくまでも例です。児童・生徒や地域の実態なども違いますので、すべてに役立つということはないかもしれませんが。ただ、ここに挙げられた授業を実践した先生方が大切にされた見方・考え方は、これからの学習の方向性とも関連しており、今後の授業の参考にもなるのではないかと考えております。

どうぞ、この実践例がよりよいものになるよう検証していただき、よい点、改善点などをご指摘頂けると、今後の私たちの実践にも大いに役立つものと考えております。

北海道教育大学附属札幌学校 小・中・ふじのめ学級連携教育

グローバルな視点を基にした小・中・ふじのめ連携教育

発行者

北海道教育大学附属札幌小学校

北海道教育大学附属札幌中学校

北海道教育大学附属札幌小・中学校特別支援学級(ふじのめ学級)

発行日

平成 31 年3月1日

各校ホームページ

(附属札幌小学校) http://www.hokkyodai.ac.jp/fuzoku_sap_syo/

(附属札幌中学校) <http://www.hue-fsj.ed.jp/>

(ふじのめ学級) http://www.hokkyodai.ac.jp/fuzoku_sap_fujinome/